# 冬雷

短歌雑誌　TOURAI

2023年・6月号

二〇二三年六月一日発行（毎月一回一日発行）　第六十二巻第六号　（通巻七三六号）

## スマホの写真一葉・短歌二首37

国道195号線　　松中　賀代☆

緑の葉繁れる中の国道を大型ダンプの轟音つづく

轟音のあいま合間にうぐいすの声もとびこみ又も消される

## 6月号　目次


冬雷集……1
作品一……20
六月集……35
残響集……40
作品二……50
作品三……62
四月号冬雷集評……山本三男…14
四月号作品十首選（冬雷集・作品一・四月集 / 残響集）……15
今月の 30 首（「東日本大震災」）……岩渕綾子…16
四月号作品一評……橘　美千代・小林芳枝…18
四月集 / 残響集評……ブレイクあずさ・大山敏夫…42
萩原千也を読み松倉米吉を思う⑵……大山敏夫…44
四月号作品二評……桜井美保子・町田勝男…48
交流他誌管見……中村哲也…59
四月号作品三評……井上菅子・鈴木計子…60
歌集・歌書御礼……〈編集室・佐藤靖子〉…69
四月号作品十首選（作品二・作品三）……71


表紙絵《オクラの花》嶋田正之 ／ 題字　田口白汀

# 冬雷集

WBC決勝クローザー　　大山敏夫　埼玉

ひざもとを抉る初球のスライダー外れて打者の全身ゆるむ
打者の好む真中低めにビュと伸び鋭くバット空を振りたり
躰躍り投込む直球ホームベース掠めるやうに外へ逸れゆく
息ととのへ投じたるど真中ストレートまた空振りす振り遅れぎみ
空振りの勢ひに一歩二歩よろけトラウトの口歪む瞬間の見ゆ
2ボール2ストライク渾身の102マイル外の低めに逸れつ
フルカウントの一球は内角より外へ浮き上がるスイーパー空振り三振
双手握り突き上ぐる大谷叫びつつグローブ投げ帽子投げジャンプしてをり
マウンド辺り選手ら抱き合ふ歓喜のさま彼のマンダラチャート思ひ観てゐる

春は黄の色　　赤羽佳年　東京

うつぶせに腰を揉まれてゐる姿勢リズミカルなるマッサージ受く
リハビリの二単位の四十分横たはり眠りが来たる今の姿か
汚れたる手を洗はんと昼過ぎてベランダより立つ昼飯が待つ
時来れば写真でもよし壁に掛く百合の樹の花春は黄の色
雨戸無き部屋に長住み繰るなどの言葉使はず半世紀過ぐ
新聞受けに新聞入るる音のしてのち駆けのぼる足音響く

土の道踏まなくなりて幾年かあの感触をひそかに恋す
連翹の開花に春を実感すガラス戸の前の目隠しの垣

赤間洋子　東京

午後九時過ぎ友の電話の着信音男性の声で母死すと言ふ
度々の電話に応答無き故に来てみれば玄関で息絶えてゐたと
二週間前知人の個展見に行きてランチを食べて別れたばかり
告別式は親族のみの少人数友人知人は別室で待つ
焼香の順番が来て式場に入れば遺影は微笑みかける
香に指を触れれば俄にこみあげて零れる涙抑へかねたり
クラクションひとつ鳴らして霊柩車桜吹雪の中を去りゆく
世話好きの友はグループの会長で展覧会を盛り上げて来ぬ

兼目久　栃木

むつくりと土を押し上げ芽を出せる馬鈴薯の芽は生気に満ちる
三月に入りて暖かき気候なり「しもつかれ」作るは二月に一回
池の面にばたばた羽を動かして春到来を喜ぶ水鳥
プロ野球開幕以来プロ野球の記事で賑はふスポーツ欄に
近年は三月中に満開になる桜の木開花早まる
防衛費を増額とする案を突如一方的に決む岸田内閣
認知機能検査高齢者講習のハガキ受取る予約をせよと
海浜に高層ビルが立ちをれば海風とどこほり気温が上がると





送迎のクルマに見惚るる神田川さくらは満ちて水辺にふはり
赤や黄の帽子かむりて遊ぶ子等大樹のさくら散るを追ひつつ
園庭のさくらは風に舞ひ上り吾がベランダに花びら散らす
街路樹の新芽は忽ちみどりなし吾が街並は勢ひづきて
街路樹に混りて花桃海棠が咲き揃ひたり賑はひみせて
久々に園の花壇を巡りたり春は溢れて花も溢るる

山﨑英子　東京

人数の増えたる体操教室にマットを敷けば窮屈感あり
誰も皆顔みて話がしたかつた雨降る中を十二名の友
新緑の中に桜の見えかくれ雨降り頻るに花びら散らず
澄む水の流れを埋め自生するクレソンの葉の色濃きみどり
好きなだけどうぞと言はれ手折りたるクレソンの茎意外に柔し
七つほど花開きたる駿河台匂ひ桜のわが背丈越ゆ
道隔てナンヂヤモンヂヤと海紅豆の白と紅とが共に咲き出す

茶園　櫻井一江　東京

バス降りてかなりの階段上がり行く山懐の高山寺の境内
国宝の「石水院」に坐し聞き居りぬ開祖明恵上人の遺訓また御歌
雨の中「日本最古の茶園」たる高山寺の茶園のみどり勢ふ
自然石の重ね合はせの石段は雨中に滑らず歩める不思議

栂尾の「本茶」は宇治へ移植され宇治川の水と地盤に適せり
優良茶「宇治七茗園」の指定受けし内唯一残るは「堀井七茗園」
高台に広がる茶園の日除け幕木々の表情見つつ使ふと
「栂尾」から宇治に根付きて栄え来し茶園の伝統守り居る処
有泉泰子　山梨

紙袋両手に下げてホワイトデー「今日行く今日用」ある夫をよろこぶ
雨止みて高校球児行進す山梨代表第一試合とぞ
お祖母ちやんのみそ汁美味しい教へてと来たる孫とでキッチンに立つ
煮干味噌だしの素をも一袋ばあばのはなむけの野菜たつぷりと
帰り行く孫との慣はしハイタッチ力強きよ温もり残る
家族総出で上京の孫を送るとぞ一人で送りしわが子らを思ふ
新装の校舎の前で礼服着て笑みのあふれる写真に安堵す
黒田江美子　千葉

開発を免れた地の五十年目楠木樫の木貴重な樹林
一本の桜に近き山桃と貝塚伊吹の陽を遮りぬ
明らかな陽射し不足に健気なり花枝先に満ちて揺れをり
常緑の樹々に囲まれ枝垂れ咲く花は三春の子孫木なり
物干しに隣家の主婦と談笑し二日後の訃報あまりに悲し
亡き人の手塩にかけた芝桜花ボラの花壇地域に遺る
ひたすらに肩甲骨を上下させ重き頭部の解消図る





基礎年金「特別徴収」の名の下に順次引かれて受領は五割
冨田眞紀恵　富山

青空の下に輝くうめの花一とき老の心なごます
だれか来て何かを書いてくれないか青一色の今日のこの空
青木初子　神奈川

育て来て幾年なるかカナダゲシ八重の白花一つひらきぬ
カナダゲシと記しある札挿す鉢の雑多の草のなかに花もつ
大輪の白花咲かす牡丹に茎二本出で蕾は一つ
牡丹の二十五センチ越す花を支へて掲ぐ茎撓めつつ
強き風に去年は折れたる牡丹に蕾の育ち支柱を立てぬ
職員の許可をもらひてアイスクリーム介護施設の夫の口に
唇の力の弱くスプーンのアイスクリーム零す夫は
橋本文子　鳥取

水仙が一輪二輪咲き始め菜の花連翹（れんぎょう）黄色が続く
春の花先づ黄色かと見る日々にチューリップの赤濃く淡く咲く
鮮やかな春の庭にはシヤガ白く静かな姿に今年も咲けり
菜の花も小松菜の黄もやや濃くてちんげんさいはやや淡き黄
鉢植ゑの苺丸型の葉の中に丸く小さく実の見え始む（四月三日）
酒向陸江☆　東京

「草取りは無心になれて大好き」と友の言葉は深く残れり

草取りを好きと思えば苦にならず朝々自然に手が伸びている
路地庭にクリスマスローズは勢いてこぼれ種より又増えてゆく
こごまりて花を覗いて「これは八重」「これは一重」と花好きの友
下向いて謙虚に咲きたるクリスマスローズ花のお陰で友情深まる
プーチンの猜疑心より始まりて不穏な空気の世界情勢
ミサイルを飛ばし喜ぶ金正恩玩具にはしゃぐ幼の顔して
「和をもって尊しとなす」世界観を持って下され各国のリーダー
　折に触れて　　天野克彦　大阪
久々に髪を刈らんと春の日のかがよふ町に出で来つわれは
蟻が曳く羽を些事とは思へずにこの公園を去り難くをり
夕闇の灯は遠きほどきらめきて足もと暗く帰りてきたる
春の夜のさくらの坂のその先はわが家なりけり灯りなき窓
夜のさくら寒さ戻りて紺青の空に星くづ冷ややかに見ゆ
ほうほうと声あげるごと日日に若葉の萌えのこの勢ひよ
林中に見えはじめたる花こぶし青ぞら指して歓びをうたふ
　　山口嵩　福島
いつよりか洗ひ物する吾ありて今日はひさびさキャベツ刻みつ
カレー粉の量多すぎと「指摘」されこれが「本場」と水をひとくち
旨しとも不味しともなき此のところ料理について語ることなし
父たてる姿みざりし厨房に吾入る機会しらぬ間に増す





趣味なるか料理自慢の友の言「まづ始めたら」に材料買ひ出す
会話なくスマホ見せ合ふ生徒らはときに笑顔でアイコンタクト
　　中村晴美　茨城
花桃の薄紅色が覆ふ春ここ十年に増えたる風景
震災後原発事故の風評に食べ物にあらぬ花桃植ゑらる
あぶら菜の蕾を摘みて味噌汁へ自宅の庭の小さき畑より
浴室と洗面所をまづリフォームす設備が古き築二十年
浴室の手摺りの数は適正か老後対策正解わからず
洗面台の高さがわれに合はされて腰の痛みの解消さるる
退職金五年たらずで半減す人生設計雲行き怪し
　　吉田綾子☆　茨城
菜花つみ笊いっぱいに持ち呉れる友の気立ての良さを思いぬ
三月の夏日に乾くサボテンの鉢にどっぷり井戸水を遣る
色彩のさまざまに咲くチューリップ庭の静穏日々に広がる
高温に椿の花のどっと落ち庭はさながら花の絨毯
強風に散りたる樹々の落葉が広き芝生に白くあやなす
乱れいる世に心の痛むなり老いの身に重なるPET-CTの検査
PET-CTの検査の結果異常なく「苦しみましたね」と主治医はやさし
　　高松美智子☆　栃木
背中にも目のあるごとく気を配りてレジ打つ女性が店を切り盛る

赤黄みどりと毛糸の帽子の地蔵様がそれぞれの表情に参道に立つ
紅葉マークの車より降りたる老ふたり杖を頼りてぼけ封じ観音に参る
ぼけ封じの成就院の本堂の左に座しいるおびんずる様
疎開先は静岡富山と言い合いて少女の記憶を語りあうふたり
眠りいる大藤の根方にドリル入れ液肥施さる春彼岸すぎ
潔く刈り込まれたる薔薇の枝の棘の先まで三月のひかり
真白きも薄桃色も柔らかく風に撫でられ雪柳揺れる

髙橋説子　栃木

某作家に「顔のパンツ」と称されたるマスクそろそろ脱ぐとき来たり
数か所の桜を観ては手を合はす特に念入りに惚け封じ観音
しやがめない膝の憎らし腰折りて伸ばす手に触る芍薬の新芽
ミニ本の「百人一首」は子の部屋に栞そのまま埃被れり
第一子の誕生よりも先だつたあなたの長き闘病の始まり
覚えきれぬほどのあなたの病歴のあとに私の大腸ポリープ
血管を撫でられ探られ針五回刺されて始まる検査前点滴
羞恥心を捨てて見てゐる大腸のポリープ三つユスラウメの如し

大塚亮子　東京

コロナ禍に帰省叶はず早や三年今年の夏は墓参に帰らむ
家守りくれたる兄の施設に入り空き家に変はる生家を思ふ
九人家族に過ごしし頃の思ひ出のあれやこれやに心温もる





桐箱に入りたる私の臍の緒を母見せくれし思ひ出ひとつ
引き出しに仕舞ひおかれしわが臍の緒は何処にありやと思ふことあり
千鳥ヶ淵の桜を共に見し友を思ひ出しをり逝きて幾年
千鳥ヶ淵の桜はひとりで見る慣ひ人の流れに逆らはず行く
桜吹雪といふ他はなし散るさくら花びら水面に更に美し

嶋田正之　埼玉

分厚き手
テレビドラマ「見知らぬ橋」の撮影にメンデンホール氷河に立ちき
馬の背の如き氷河の上のロケ加山雄三、三田佳子等と
クレパスに宙吊りとなる撮影をサポート呉れし植村直己
ナイロンのザイルを体に巻き付けて踏ん張る植村宙吊る加山
北極圏単独横断冒険の費用を稼ぐためなる仕事
三日間氷河のロケの宿泊はツインルームに直己と二人
犬橇の訓練のため訪ねたるエスキモーのこと面白く聴く
分厚き手握り再会喜びし対談番組収録の日
マッキンリー単独登山のクレパスに滑落したるや行方分からず

江波戸愛子☆　埼玉

三人の家族なれども其其の場所にてそれぞれアイパッド見る
ピーナッツ多くのりたるクッキーをまた買いにゆくオランダの菓子
ひとつだけ一つだけよと自らに言いてまたとるアーモンドチョコ
めくりたる暦に予定を記しゆく初めにあなたの通院の日を

頑なに拒みてきたる夫なり納豆あるかと起きしなにいう
夕食を早めに調えやわらかな緑のゆるる庭をみている
髪の毛を切ろうかそれとも伸ばそうか鏡に映る私に質す

橘　美千代　新潟

雪溶けて今日見つかりぬ正月に失くしたる水晶の玉五つ
アクセス多き学会セミナーにログインできずわがパソコンの買ひ換へ決めぬ
気がつけば十年近くこのパソコンを使ひきたるかアナログなわれ
旧きMacより新しきMacへとデータ移りゆくクローンを生まむ
今日もわが車のまへにキジトラ猫飛び出して来て急ブレーキ踏む
吊り橋をわたりて見ゆる土砂を盛り修復されたる堤防と宿
被災後に再開したる温泉宿あの柴犬が尾をふり寄り来る
風の日に森を歩めば聞くものか「松に松の風樟に樟の風」

ブレイクあずさ☆　カナダ

テーピング解いて右手をまじまじと眺めるこんな形だったか
リハビリは四手連弾ブラームス怯む右手をぐいと押し出す
わが硬き右手のこぼす音拾いワルツを続ける友の左手
散る桜花ガーゼのように重なりぬウクライナ荘にロシア会館に
ロシア語もウクライナ語もＢｅｃＨａ（ベスナー）は春誰しもが焦がれ待つ春
手作りのペロギー売りの女らの雲雀のようによく通る声
ランタンの底に花蜂死んでおり身を寄せ合いて冬長すぎて





春遅きカナダの港をゆっくりとSAKURAという名の貨物船行く
傷多き船体鈍く光らせてNM　SAKURA港に休めり

町田　勝男　埼玉

八つ裂きにされたる悲鳴か耳鳴りはそれとも老いの生き変はる声
ザりザりと砂かむ心地クレメジン飲まずば後は透析となる
啓蟄を待たず出でたる蜥蜴の背春日にきらり一瞬のひかり
何言ふも翔平と聡太に及ばざり必要度まさる貴重な人材
旅立ちの季節になれば思ふことポーランドの夏ウクライナを知らず
ワルシャワの条約機構軍空港に百円ライターに喜びし兵
カトヴィツェ、アウシュウビッツもクラコフもわが足跡の遥かになりぬ
雛罌粟が鉄路の終点に咲いてゐきアウシュウビッツに今も咲けるか

稲田　正康　東京

青空に紅梅二本ひらきたる公園にだれも足を止めない
揺れゆれるあせびの房に降りかかる花びらありてしばらくを立つ
太き幹に小く芽のあり桜ばな二つ三つ咲くつぼみも持ちて
さくら木の枝えだ花の遅速あり満開のえだ若芽もつ枝
雪積めるあとの公園ぬれてゐる土に子どもら坐りてあそぶ
あづまやの外にて靴の土はらふ一人をりたり三人のうち
遊具より遊具へ走るをさなごを母親が追ふコートなびかせ
風つよく人のすくなきすべり台かけのぼり滑る今日は女の子ばかり

古　嶋　せい子　熊本

枝はなれ飛び立つ鳥の残したるゆらぎを見をり猫と並びて
声だけは元気なのよと言ふ友の病ひの話あるけぬ話
雛の餅とどけて下さる人のみて雛かざらねど明るきひと日
夢の中のわれ健やかに歩きをりこの世にをらぬ友と並びて
この春は鶯なかず梅さくら過ぎてみづきの苞ひらきたり
風の来て動けば蝶の舞ふごとく見ゆることありこぶしの花は
暖かく見えたる空に誘はれて歩く道の辺どんぐり踏みて
この雨にさくら終はると思ひつつ窓に立つ昼なげきもひとり

姉　川　素枝子　福岡

唐突に雪降り積みて眼の限り清くなりたり清き道ゆく
九千部の嶺の後ろの背振山ゆき止み雪を冠りて出でぬ
天に向き枝を広ぐる大欅ゆきを纏ひて並木路かざる
将軍梅と伝へ来たれる庭に来て香りききをり手を引かれつつ　南北朝戦跡宮ノ陣
古き世の戦を記す碑に将軍梅の来し方知れり
淡あはと紅さす花の凛として小枝に開く将軍梅は
将軍梅かこむ紅梅の花みちて戦を知らぬ香のきこえ来る
仙人のごとき翁にもらひぬと梅の小枝を子が瓶に挿す
ほのかなる花の香りの室に満ち老いの住ひの早春のいろ

井　上　菅　子　山形



外反母趾の力加はるところよりソックスカバーの穴は広がる
Ａ４に車の型式細々と記して五百十円の領収書
教壇も児らの机もそのままに二十四の瞳偲ぶ映画村
現実と虚構の構成いつ観ても泣かされてゐる二十四の瞳
高松空港の待合時間に「相棒」の犯人いまだ逃走中
轢かれたる路傍の狐獣医師の君は山まで運び葬る
誰もゐぬ家に一人の誕生日春めく服に着替へて家事す
昨日より今日華やかに咲く桜八幡様の杜を見上ぐる

**私の暮らすまち133**

## 古典桜―山形県白鷹町

（「うた新聞」４月号より転載）

井上　菅子

私の暮らす白鷹町には、樹齢五百年以上の古典桜が六本もある。

いずれも品種は江戸彼岸で、県の天然記念物の指定になっている。

最も古いのが樹齢千二百年の薬師堂の桜で、坂上田村麻呂が奥州征伐の時、手植えしたと伝えられる。樹高は高くないが、大きく捩れた瘤の隆起した巨大な幹が歳月を語る。

同じく樹齢千二百年の子守堂の桜には、樹下に子守堂という小さなお堂が祀られていて、病弱な城主の子供を無事に育てた後、忽然と姿を消した賤しい身なりの童女（仏の化身）を祀ったものだと言われている。

釜の越桜という樹齢八百年の、空をも覆う見事な花を咲かせる樹があった。ところが人気が出て観光客が増えるとともに、すっかり枯れてしまったのだ。

この中では樹齢が若いが、六百八十年の殿入桜（どのいり桜）という今を壮りの大樹もある。

文政十二年（一八二九）藩主上杉斉定が、領内巡視に立ち寄り花を鑑賞した事から、その名が付いたと言う。

他の樹にもそれぞれ言い伝えが残っているが、老齢の桜には支えの柱が何本も木の回りに立てられ、まだまだ頑張れと手入れが施されるのだ。

開花期には観光バスが細い道に連なる光景も見られるが、まだ無名の頃、釜の越桜はたおやかに咲いていた。

歴史ある古典桜を、多くの人に見てもらいたいと思いつつ、桜の身になって私は思う。

**・静かに咲き静かに散りてゆきたしと千二百年の桜のつぶやき**

# 四月冬雷集評

山本　三男

警官らがガガツと歩道の敷石を引き剥がす見しはこの傾斜道　　大山敏夫

団塊の世代にとって六十年代後半の大学紛争は忘れられない記憶として残っています。筆者は当時の紛争の様子はテレビなどでしか知りませんでした。作者は現場の一部を実際に見て、その様子を鮮明に記憶しているのに驚きます。

アマリリス二鉢培ひ幾年か咲かせる前の置き肥を二つ　　赤羽佳年

植物を長い間育てていると栽培のコツがつかめてくるものです。結句の「置き肥を二つ」に、アマリリスの栽培が手慣れている様子がよく表われています。

生ひ茂る枝払はれてすつきりと冬の日のさす空き地現る　　森藤ふみ

生い茂っていた枝が剪定されて景色が一新された様子がよく描かれています。結句で今までもあった空き地を「現る」としたのは、うまい表現です。

祭壇にほほゑむ友は「北帰行」しみじみ歌ひし十日前の夜　　山口　嵩

「北帰行」は小林旭の流行歌が知られていますが、元歌は旧制旅順高等学校の二年生の青年らしい苦悩の込められた寮歌です。故人はこの歌をどんな思いで唄ったのでしょうか。その故人への尽きない思いが伝わる感慨深い作品です。

蕎麦の次は近江屋のケーキ買ひに寄る店の構へも変はらずにあり　赤間洋子

寄ろうと思った近江屋が、下の句で、変わらずにあったことに安心している様子が感じられます。この感じは法事を終えた気分に通じるものなのでしょう。

簡便にパック詰めせる七草を求めきて炊く七草粥を　　吉田綾子☆

最近では七草粥の頃になると、七草をパックしたものが売られています。野にある七草でなくても、無病息災を願う思いは同じなのでしょう。

雪明かりに遊び惚けて夕飯を知らせる母の声遠く聞く　　大塚亮子

どこからか、お母さんの声が聞こえてくるような歌です。雪明かりのなかで時を忘れて遊んでいたのでしょう。このような記憶は宝物です。

資材館入れば何でも作れそう飽かずに歩くときに止まりて　　江波戸愛子☆

ホームセンターの資材館には、家具などを自作するための様々な資材が売られています。それらを興味深く見ながら歩いている様子が的確に詠まれています。

そこいらの猫みな家へ放り込む向こう通りにコヨーテ来れば　　ブレイクあずさ☆

日本では見られない光景です。コヨーテを結句で登場させたのは巧みです。オオカミが絶滅した日本では、シカによる植物への食害が深刻な問題になっています。猫にとっては迷惑でしょうがコヨーテも大切な生きものです。

人と人のかけがへの無き邂逅も本も然なりき書肆は川越　　町田勝男

人と人との出会いは時に偶然では片付けられない運命的なものがありますが、本も同じでなのでしょう。小江戸川越にはまだ良い書肆が残っているようです。





# 冬雷集

川上美智子

見た目にはフェルトのやうな小さな巣白黒頭のちよこつと覗く　　森藤　ふみ

金柑の熟れるまで枝に有るや無しや食べ時確かな鳥には負ける　　青木　初子

ウクライナのニュースに父母偲ばれる吾の出産戦禍の只中　　酒向　陸江☆

味わかる喜び噛みしめカレー食ふコロナ後遺症ひとつ解消　　中村　晴美

祭壇にほほゑむ友は「北帰行」しみじみ歌ひし十日前の夜　　山口　嵩

セーターに合はせて爪の色替へる七十越えの楽しみ得たり　　髙橋　説子

寒き野に七草粥の草摘みし里の思い出はるかとなりぬ　　吉田　綾子☆

一畳ほどの紙に蝶の字ひらがなに幾つ書きをり蝶舞ふごとし　　大塚　亮子

後屈の闇夜の星の変らねどわが生きる星人が変へるか　　町田　勝男

秘め事も無ければ多くの欲もなし雪しんしんと身を浄めゆく　　井上　菅子

# 作品一

高松美智子

立ち座りよいしよと言はぬ吾であれ動画の体操積み重ねをり　　桜井美保子

登校の児らに迷子の柴犬は朝な朝なに頭なでらる　　正田フミヱ☆

たこ焼きがくるんくるんと回されてパックに並び「ハイ」と渡さる　　糸賀　浩子☆

雪だから今宵は鍋とつぶやきて大き白菜ざくざくと切る　　飯嶋　久子☆

霜柱もち上げている蕗の薹春一ばんに枯葉かけやる　　松中　賀代☆

数値など只の数字と思えども人間ドックの結果に惑う　　本郷　歌子☆

書き出せば去年の良いこと百以上スラスラと出て幸せなりき　　村上　美江

年の瀬の高きに吊しし飾り松降ろせば綿虫八方に散る　　井上　槇子

吾が文字が好きだと言ひてくるる友に薄梅色の便箋選ぶ　　中島千加子

好きな事やりたきやうにやればよし珈琲じつくり蒸らしつつ思ふ　　鈴木やよい

# 四月集／残響集

須藤　紀子

能を観るのみには非ず柳川の鰻処に向かふ楽しみ　　益坂　順子

如月に入りて日毎に降る雪にため息つきつつ今朝の雪掻く　　東　ミチ

半日蔭の裏に植ゑたる蕗出でて黄色にぽつと辺り明るむ　　大野　茜

ひとつまみの草の根の土に十億の微生物働くコンポストの中　　藤田　夏見☆

文旦の黄の実朝陽に光りおり墓地への細道曲がりたる時　　藤田　英輔☆

衿を立て長く待ちたる電車きて降りたる人の席あたたかし　　内垣　米子

白川でスッポン釣りし人もをり何だかとても逞しき川　　吉岡　松世

ランタナの紅が目に染む寒き朝花なき庭に一きは紅し　　井上　法子

この痛み起きれば治る仕事痛天地返しの二月の土起し　　谷田　律子☆

なつかしき父のやうに待つてゐる入り江の小舟陽にゆらゆらと　　松﨑みき子

## 東日本大震災

岩渕　綾子

3・11のち十二年夢の如し盛岡の眼科に入院中に家は全壊流失す
川又先生の温かき言葉に励まされ気丈に生きる手立てを知りぬ
大地震の一週間後の大船渡瓦礫の山に愕然としぬ
大津波に残りし物は零し一つわが手作りせしに感慨ふかし
盛岡より高速バスで子と二人西新宿で長子と待ち合せしぬ
マンションの避難生活は八ヶ月一人住ひに悩みは尽きず
避難中冬雷大会に出席す川又先生大山先生小林先生皆優しく
大会参加は初にして最後の出会ひ東陽町のホテル・ルートイン
十一月末念願叶ひ故郷に吾迎へらる四季桜小さき花咲く
地震後にわが住みし浜町は住宅禁止で商店街となり面影のなし
大津波に流されしバッグ避難せし千葉にまで警察より届け来ぬ
仮設ぐらしは三年十ヶ月あまたの支援に明るく生きぬ
千葉の人手作りの六地蔵ぬひぐるみの鶏の親子犬の親子われに呉れたり
原発事故のをさまらぬ地に手術受く優秀なるスタッフに感謝は尽きぬ
松原を朝なあさなに散歩せしうから偲べば声がきこゆる
孫夫婦を活魚店「すごう」に招待し三陸御膳に祝杯上ぐる
生れ出でて夫婦となりて人生を睦みあふこそ孝の始めぞ





ショルダーバッグ物には非ず心なり誠ある友の繋ぎ行きけり
あかときの温泉につかり大船渡湾海にトンボロ飛行機雲見ゆ
生島ヒロシの実感溢るる言の葉よ生き残りしは生きるが務め
アナウンサーの「生きるが務め」身に染みて再度の病に教訓となる
奥津城に子らと集ひて拝みぬさぞかし亡夫も嬉しかるらむ
西和賀町の無病息災願ふ「人形送り」人の心のゆたかさ思ふ
デイケアの送り迎へに背の君が妻の手を取りきざはし歩む
髪カットにも送迎うけてありがたし高齢社会の変化なるらし
貰ひたる早採りわかめ味のよし吾を案じて茹で来て呉れぬ
「船上回向」十三回忌の大船渡湾にまみゆる泉大津市と盛の住職ら
家に近きサンアンドレス公園前の折鶴流し十三回忌法要行けぬが悲し
「下手でもよい自分の歌を詠め」に励まされ二十年余を続け来たりぬ
3・11に生きのこりし吾に息子言ふ父の分まで長生きせよと

## 四月号作品一評

橘　美千代

ひとつ本にクリスティーとクリスティあるのに気づく電車の中で　桜井美保子

読んでいる本に誤植を見つけた。そんな時は何とも言えない気分になるのだろう。冬雷の校正をされている作者である。無意識にセンサーが働くのか。筆者も絶版の本に記載ミスを見つけ、気になって内容に集中できなくなったことがある。ちょっと寂しい。

カーテン越し食事の介助に接しゐる女性看護師の声のやさしき　野村灑子

救急搬送されて病院に入院中の作者。カーテンの向こうで女性看護師が食事の介助をする声が聞こえて来る。カーテンごしの声であればこそ一層伝わるのだ。その親身な看護師のまことの優しさが。初めてのセルフレジにてどぎまぎす買いたる数を確かめて出る　糸賀浩子☆

コロナ禍でスーパー等のセルフレジ化が進んだ。レジ作業も支払いも全て自分でするのだ。筆者も初めてのセルフレジではとまどった。買ったものの数を確かめてそそくさと去る。感じがよく伝わる。

都会つ子高田移住の若漁師かき養殖に奮闘中なり　岩渕綾子

都会から移住し漁師になった若者を地元の親方が面倒をみるという人情味溢れる良い一連。ただ上の句が名詞の並列で詰まっていて硬い。「高田に移住の」であろう。助詞「に」は省けない。普通「若き漁師」であるが作者の「若漁師」を生かし「都会つ子高田に移住の若漁師」や「都会つ子今は高田の若漁師」などではどうか。

身辺の整理をすると友よりの葉書一枚繋がり断つと　本郷歌子☆

一読して下の句が心に刺さる。受け取った時の作者の気持ちはどうかと。「葉書一枚」が効いている。たったの葉書一枚で。寂しくはないのか顔を想いつつ友に最後の手紙「元気で」　同

先の歌に続く。くだくだ理由など聞かない。ただ一言「元気で」と返す作者のいさぎよさ。見事だと思う。結句が決まる。手に取りてその場で一気に読みつくす川又先生の響きなつかし　伊澤直子☆

筆者が冬雷に入会して十年余りの間に、川又先生をはじめ何人もの方が亡くなられた。残された歌は亡き人を偲ぶよすが。名を呼んでみてと友の言ふ電話「チコちやーん」「ニヤーン」一声す　戸部田とくえ

情景が浮かんで思わず頬が緩んだ。こんな楽しい歌もいい。「ニャーン」から「一声す」までの呼吸が何とも言えない。

惚けるが勝ちと言ひし友の安否知る由もなし吾老いにつつ　神津早智子

ジョーク好きの愉快な友人であったのだろう。上の句に楽しかった交友が偲ばれて。一転して寂しい下の句の現実。

森閑とめぐりもみ寺の大屋根も思ひがけざるけさの初雪　大塚照美

流れるような調べにのせて詠まれる景の美しさ。雪が降る朝はひときわ静かで。初句の「森閑と」が一首全体に響きわたる。初雪の清潔な白のイメージが広がり爽快。



## 四月号作品一評

小林　芳枝

ひとつ本にクリスティーとクリスティあるのに気づく電車の中で　桜井美保子

発音の微かな違いを見逃さず誤植を目にとめる確かさはさすがである。電車の中で読んでいる本なのだと背景がしっかりと浮かび上がってくる結句も大切な役目をしている。

車椅子を二男に押され温泉に向う夫は常見せぬ笑み　斉藤トミ子☆

息子に車椅子を押してもらって家族で温泉に行くという幸せがじわりと伝わってくる。いつもは見せたことのない「笑み」が妻である作者には解る。夫の喜びが自分の喜びとなっている。

処方箋を片手に仰ぐビルの窓に光差し来て雨あがるらし　田中祐子☆

診察が済んで薬をもらうだけになり、ほっとする気持が明るく表現されている。初句の「処方箋」が効いている。

運転歴六十年を区切りとし三河に向かう夫を見送る　高橋燿子☆

最後のドライブにしようと決断して出かける夫君と見送る作者。その思いには計り知れないものがあるだろう。素敵な旅行になりますように。

角曲がりたわわな柿が目印と枯葉掃く僧教へくれたり　田端五百子

近くまで来て目的地を探すことは私なども度々経験するが、実を沢山つけた柿の木を目印に教えてくれた気さくなお坊さんの人柄が心に残る。

穏やかに晴れ渡る空まるで春昨日の雪は跡形もなく　野崎礼子☆

昨日あんなに降っていた雪が消えてしまった。今日の暖かさを「まるで春」として戸惑う様子が浮かぶ。このところの異常な寒暖差を思わせる。

雪だから今宵は鍋とつぶやきて大き白菜ざくざくと切る　飯嶋久子☆

大雪の降るなかで、こういう日はやはり体の温まる食事がいいね、と切り始めた白菜の「ざくざくと」に勢いがあり、寒さに負けない逞しさも感じられる。

少しの酒に饒舌となるわが友ら笑って涙して思い出語る　長尾弘子☆

長いつきあいのある仲間なのだろう。少しの酒に心が緩んで語り合う情景が浮かんでくる。心の疲れを吐き出してまた明日から元気に頑張ってゆくのだろう。

弁当を三人分買い今晩は食器を洗う面倒もなし　山本三男☆

最近のお弁当は美味しくなっているので時にはいいですね。いつも後片付けをしてくれる奥さんへの思いやりが嬉しい。

まだ暗き日の出の前の道を行く己の影に怯えたりして　稲津孝子

早朝ウオーキングであろう。寒い時期に頑張っておられる様子に敬服する。下句のちょっと怯えるようなところに繊細な感覚がみえる。ご無理のないように。

七福神めぐりて通る畑には立ち枯れのナスが実を残しをり　鈴木やよい

新年に七福神の社寺を巡ってお参りする途中、畑に立ち枯れているナスとその実に目がとまる。丁寧にありのままを詠まれた下句に作者の思いが籠る。

# 作品一

桜井　美保子　神奈川

曇りたるレンズにスプレーの泡を掛くもう一時間作業のありて
買ひ置きのブルーベリーのサプリメント思ひ出し飲む眼(まなこ)疲れて
月に数度役立つことあり『古語辞典』『短歌文法65講』
胴切りをしたるサボテン冬越して切り口の横に二つ芽の出づ
冬物と夏物混じりごちやごちやの夫の引出し一気に整理す
引出しを締めればいいのに開けたままそのくらゐはだまつてゐよう
「片付けはもうできないよ」それならば私に任せて衣服の入れ替へ
けふのわれ面倒がらず手に洗ふダウンのベストとベロアのジャンバー

飯嶋　久子☆　茨城

麗らかな陽に誘われて野に出れば田の縁染めて蒲公英の咲く
踊子草おおいぬのふぐりも時過ぎて蒲公英の黄独壇場なり
草餅を作らんと不意に思い立ち手持ちの袋にヨモギ摘むなり
疎開地に姉と二人で摘みしこと不意に浮かびて亡き人を恋う
朝に昼にネモフィラ満開のニュースあり自転車でゆきしこと今は昔
深夜までサムライジャパンに酔う母を娘は横目で寝室に消ゆ





敵味方力尽くして戦えば感動を呼ぶその清々しさに
大陸より黄砂飛び来るミサイルも青き地球は今何色なりや

山　本　三　男☆　群馬

わが庭にチューリップいくつも咲きたれど春休みにて通る子のなし
青年はやはり東京に出るという地元に二年務めたるのち
サボテンのトゲの刺さりて痛む指気にせずおれば自然に抜ける
稲の穂がフリマサイトで売られおり稲育てんと調べてみれば
一人居る二階の部屋にゆっくりと赤鉛筆を削りていたり
年金で生きられるのは幸せと工事に来たる老人は言う
三人のベトナム人は介護での貴重な力になりたるときく
訳もなく酒を飲みたきときあれど酒を飲まねば体調の良し

吉　村　昌　子　千葉

公園のブランコ揺れるいつまでも子等帰りたる後も風乗せ
紋白が門よりもつれつつ入りチューリップ咲く窓辺へと来る
七時半中学生の三人の自転車が行く今日より白シャツ
あら今朝は自転車四人楽しげに会話しながら中学生行く
四ヶ月ひ孫の誠太まわり見て口をへの字に泣き始めたり
家前を朝あさ通るもこもこの茶色の小犬待ちて撫でやる
もこもこの茶色の小犬かわいくて雑誌で見つけおもちやを買へり
杖の人誘いサロンに行く車中一人居暮らしの話とぎれず

田　端　五百子　岩手

山門の近くの陽だまり春息吹く蕗の薹七つスマホに写す
たぎる湯に早採り和布くぐらせる緑と汐の香厨に満ちたり
震災後十二年経てサンゴ付くコンテナが沖縄に漂着したり
「黒い札束」仲買人ら揶揄したり故郷の海苔ぞ父母顕ち来る
日本の景観カレンダー厨に吊る「つもり旅」十二回楽しむつもり
三歳の誕生日に父贈りくれし二尺五寸の市松人形
「まだ母さん借りておくよ」と二十三回忌の数珠を揉みつつ婿の呟く

野　村　灑　子　千葉

沈みゆく太陽にあかね色の空塗り替へられて墨色となる
海囲む周りに位置する製鉄所絶ゆるなき炎天空に上ぐ
暗黒に染まる鉄路に音させて長き列車は通りゆきたり
呼び水の如く口湿すひと口の水に大量の尿のいでくる
新しき屋根板の荷か傾斜ある屋根に置かれて冬陽あびゐる
今時の若者のやうにブラウスの裾をさめず検査のあれば

正　田　フミヱ☆　栃木

ソラマメの開花が早く心配す霜よけ不織布外さず置きぬ
割れトマトをまとめて畑に埋めたるに今年三月発芽するなり
畑にて発芽をしたるトマトの群れ抜けばトマトに殻が付きおり
並びたるトマトの苗に「苗屋さん」と家族が言えば笑ってしまう





育苗のわが家のトマトは小さくて自生トマトに逞しさあり
ふわふわのボタンの花を愛でたれば堆肥と腐葉土根元に撒きぬ
春くればボタンの花芽数えたり花芽の周りの草取りもして

飯　塚　澄　子　東京

弥生初の小指の蕾紫木蓮陽気続きて半ばに満開
紫木蓮花の小脇に新緑を二つ見せをり営み早し
幾種かの大輪の椿亡き夫の好みし庭を眺むる幸慶
白まじる椿好める卒寿我ステッキ脇にカメラを持ちて
野球戦ＷＢＣ毎夜見る準決勝はリハビリ仲間と
決勝もリハビリの場で応援す世界一とて賑はふ仲間
春休みスキー体験軽井沢二人の孫に嫁の試み
送りくるスキーの画面嬉しけれ教室にての一日体験

斉　藤　トミ子☆　栃木

バス停にバスを待ちいる女高生スマホ見ながら踵落しせり
自転車の中学生とぶつかりぬ小走りに角曲がりたる時
いつも置く場所にあらざる免許証昨日の我の動線辿る
リハビリを他人（ひと）の倍程続けたる妹退院す一人で歩ける
芹なずな土筆萌えいる畦歩む杖つく妹見守りながら
鶯や雲雀の声を聞きながら笑まう妹涙ながせり
じゃがいもの植付けしたり母言いし「彼岸前に」を守りて今年も

高　橋　燿　子☆　埼玉

終電のホーム明るくケイタイを見入る人々二宮金次郎のごとし
切実な悩み打ち明け整理がついたと友はさばさば花見の帰り
慈しみの色ほんわかと幼子が掬い遊べる桜はなびら
枝のない幹にほっこり二つ三つ白く膨らむ木蓮うらら
山桜の葉の赤優し仰ぎ見て「いいね」で通じる幼友達
師が矯める手指の様を思いつつ花を生ける久しき花展
たおやかに生けゆく様に憧れて教え乞いたる若きあの頃

浜　田　はるみ☆　埼玉

アクティブな年下友に誘われて友の水着でプールに入る
リゾートもスパも興味無く初めてハワイアンズに行くことになる
四十年振りのプールは水重く驚く程に浮かなくなりぬ
五年振りに逢う旧友は癌になり尚の事嬉し桜の下が
ウクライナ百年の歴史を知ったならプーチンが何をしても驚かぬ
沈黙は同罪なりと言う言葉肝に銘じて行動したき
知った以上黙っているのは罪という今起きている残虐なこと

野　崎　礼　子☆　埼玉

ひんやりと鼻腔をくすぐる春の風今日の散歩は足が重いよ
夕暮れの光の中に包まれて桜のトンネル未来へ続く
雨上がり桜の花びらひらひらと春の余韻を残し散りゆく





四月過ぎまだ鮮やかなシクラメン夏になるよと囁いてみる
神業と言わんばかりの一球に我も祈りつつテレビに見入る
あんな子を息子にしたいと皆が言う笑顔が素敵な大谷翔平
難病と闘う友あり古里に桜が咲いたと嬉しい便り

糸　賀　浩　子☆　茨城

ぬくき朝「ケチョ」とだけ鳴く鶯とハナニラ紫庭一面に
少年も少女も老いたるクラス会とぎれ途切れの記憶を語る
「自由に」と言われてマスクを外せない何と律儀な吾かと思う
亡き叔母の庭より移しし紫木蓮ことしはことさら大き六弁
削り立ての六Ｂ鉛筆残し逝く病める娘は筆圧失くして
彼岸会に供えし丸餅つきたてに黄粉と餡を添えて有りたり
ブロックに囲う裏口淡々とヒトリシズカは群れて咲きおり
迷惑は百も承知の夜の電話長女の居ない寂しさ次女に

岩　渕　綾　子　岩手

３・11後倒(こ)けつ転(まろ)びつ人びとは未来めざして歩みてゆかむ
３・11後わが住みたりし浜町はまぼろしとなり危険地帯に
十三回忌こぞりて市民手を合はす気仙の祈り折鶴流し
職員さんスマホ苦手な人びとに教へくれたり嬉しかりける
デイケアのボードに貼れる「佐々木朗希」老いたる人らの活力となる
３・11に被災の人らを支援する大本となりしグループ気仙苑

流さるる直前の吾が家テレビに映り息子ラインに動画送り呉る
お彼岸に3・11の魔の映像ひとり居のわれあの日に還る
樗　木　紀　子☆　東京

シクラメン三年前に頂きぬ常に陽に当て今年も咲かす
シクラメンの鉢に植物活力剤差せば十九の花が咲きたり
ワールドベースボールドームでの四試合を子と観戦す
準決勝メキシコ戦を整骨院で放映を見るメキシコに勝つ
決勝戦大谷選手と米国のホームラン王と一点取り合う
米国に決勝で勝ち世界一に日本国民喜びに湧く
田　中　祐　子☆　埼玉

こと細かき管理の栞は嬉しかりわが生日を胡蝶蘭祝い来
ほんとうに真綿色にて玄関の板間を占める蘭の気高き
五つほどの蘭の莟を数えたる少年これらも咲かせてと笑む
ジャズバンドの古きCD出で来たり鈴木章治の鈴懸の径
CDをひがなかけたる雨の日はひとりに余るカレーを作る
懐かしさの極むる今朝はそそくさと乗り継ぎ来たる姉の菩提寺
甥なのか昨夜の雨か墓石は春の陽差しに清しくひかる
倉　浪　ゆ　み　埼玉

眼あけ「お花を生けなくては」と言ひたさう叔母の法名に華の字ありて
叔母逝きてうからやから顔あはす従姉妹たちも高齢となりて





園庭の大きな大きな白木蓮あふぎ見る人スマホかざす人
ぢざう様梅の花びらいく片かマスクの顔につけて御座します
ゆき柳こぼれんばかりに咲き満ちて彼岸の供花にと心してきる
花店の中は卒業の祝花あふれんばかりの喜びの色
面だちも少しづつ変はりてひな人形眼ぱつちりのこの頃のひな
林　美智子☆　東京

青空にカリンの花が可憐なり黄色の大きな実には似合わず
四月十日松ケムシ出て大騒ぎ三月中の手入れ怠り
刺されれば激痛ありて腫れ上がる松ケムシごと枝先を切る
松ケムシ松の小枝に似せており水張るバケツに葉ごと沈める
ベランダから身を乗り出してケムシ退治奮闘するも未だ半分
風強く黄砂も飛べば大柳ゆさゆさブンブン愉快そうなり
久々にオーブン手に入れケーキ焼く皆喜べば三日続けて
石　本　啓　子☆　東京

雨上がり水戸街道を五十分歩みて隅田公園に着く
白桜スマホに写す若者は五分咲きですと教えくれたり
横浜と島根に住まう旧友に連絡つかず文も電話も
路地に住み家並み変わり年長者一人となりぬ八十五歳
長　尾　弘　子☆　東京

街路樹の木蓮ならぶその白き花びら春光を含みて重し

いち早く色なき街を明るめる白木蓮に日がな雨ふる
雨に散り踏みしだかるる白木蓮花は土色道にはりつく
墓参おえ行く手さえぎる花吹雪に顔仰向けてしばしたたずむ
父と子と脚立を据えて何枚も駅に近づく電車を写す

松　中　賀　代☆　高知

まだ咲かぬ桜の下に菜の花が一面に咲き蜜蜂も飛ぶ
ダム湖より砂利を運べるダンプカー十八台も連なり走る
カーブから数分おきに現れる大型ダンプに恐怖おぼえる
小父さんが植えた桜に今年も元気な花がいっぱい咲いたよ
押し車にすがりて歩く友人を二人で見守り桜見に行く
三椏が咲けば暖こうなるという祖母達の声が聞こえるようだ
春やさい飽くことも無く三食にお浸しサラダと新鮮な味
五株のパンジー増えて大株に郵便屋さんも花を見て行く

本　郷　歌　子☆　栃木

身を屈め身動ぎもせず窓の外見詰める猫よ何を恋する
高く響く鳴き声のあり鶯に上手下手ありや大平山の
鶯の声あちこちに聞こえきて補聴器付けた我が耳に春
ホバリングする蜜蜂はどの花にしようか迷う桜満開
満開の花を散らして鶯の飛び移りゆく真青なる空
花びらを蹴散らして行く自動車に桜吹雪の散り掛かりゆく





本棚の三段占めるアルバムの埃かむるも断捨離迷う

村　上　美　江　岩手

この道は吾の選びし道なれど選ばずにして定められしか
ふくよかに握り返して菊の花祖母の手に似てやはらかきかな
「振り向くな」「前だけを見よ」ダブルスの友と歩まむ再び吾は
初デートのデコボコ道さへ嬉しくてあなたと歩きし碁石海岸
打ち寄せて砕けて戻る波幾たび碁石海岸に虹の伸びゆく
懐より遺品の免許証取り出して若き日の亡夫と共に散歩す
満開の桜見上げずひたすらにタイヤ交換つぎつぎ続ける

永　光　徳　子☆　東京

特売の紳士用品のカタログにあれこれ迷うもう居ないのに
遠き日に夫の植えた芍薬の芽吹きは彼の便りと思いぬ
姪からの宅急便は新タケノコ直ぐに使える下処理済みの
早速に煮物作れば部屋中に春の香りと優しさ満ちる
早朝に花の水やりしておれば遠き森より鶯の声
自生したる水仙あちこち咲き立ちて自然の力に驚きて見ゆ
昨秋に除草剤撒きし裏庭にアミガサユリの咲きて嬉しき

矢　野　操☆　香川

るるりるりたまごをかける朝御飯けさのみそ汁卵をはぶく
わたしへの「ついうっかり」をとがめない人間だからお互いさまよ

にぶらせてならぬ感度をＮＨＫラジオの声にあいづちを打つ
ボトル水ストック減れば言わずとも妹ならこそ届けてくれる
マスクつけ人目につかぬだんご鼻外出どきに手放せません
伊　澤　直　子☆　東京

ベゴニアは軒下なればと油断して寒波に凍り風で飛ばさる
ベゴニアの鉢にうす紅数輪の開けばほほえみかけてくるよう
隣家の空地に立ちたる大欅日ごとに緑は色変えてゆく
花見どき雨の続けど出かければ緑生き生き花色映えたり
青空に枝垂れ桜の輝けりこの春初めて晴天となる
ゆるゆると流れる水面に花びらは付きつ離れつ形を作る
桜花散り積りたるチューリップ畑白き地面に花色とりどり
乾　　義　江☆　茨城

見て見てと三品添えたる丼の写真送り来孫はスマホに
案ずる我に孫は手作り見せむとて思い付きたる気遣いうれし
隣家より梅花ほころび吹く風に放たるる芳香漂い来たる
満開の土佐水木の花じわじわと枝一面に垂れ下がりゆく
アメリカとの決勝戦に久々の感動味わいエキサイトする
「勝ったね」とライン送れば「やったね」と息子のライン日本優勝
厨にて米研ぎおれば眩暈かと何と上下に家揺れ動く（三月二十四日　震度４）
稲　津　孝　子　福岡





あらたしき年の初めの歌会に短歌の手帳賜ひにき師は
この年の天道蟲が日の当たる水仙の茎を下りてゆけり
老人の会に供する蕗の薹出でてをらずやと友言ひてきぬ
彼岸にてぼた餅作るいつもより少し大きいねと言ふ人も無し
店先の等身大の広告に竝びて見上ぐる大谷翔平
王選手に七五六号打たれにし鈴木康二郎逝く朝刊に
昨日より庭のトマトに青蟲のをりて独りにあらずと思ふ
戸部田　とくえ　福岡

雨のあと一際のびる玉葱の畑ある身のよろこび多く
さ緑の柿の芽吹きこの年もやはり心ゆらす弥生の庭
帰省せる子に先づ告げるチューリップ見事開花の色彩り見て
佇めば清水流るる音のして高山寺境内に人影のなく
栂尾の見頃のさくらこの夜半雨の豫報ことさらうれふ
すれ違ふ人なき階段登りつつ明恵上人うやまふ高山寺
思ひのほか元気に歩けて巡る寺すべてご加護のゆゑなるもの
神　津　早智子　千葉

独り居は無理と言はれつつ退院し医療師幾人来てくるる日々
契約せるクリニックの阿部先生が来て下さるけふは持病の目眩に
この年も臥しつつみをり満開の乾通りを行く人の群
「戦国の武将と城」の放送を楽しみとせむ八十路の嫗

降りてやみまた降りてやむ三月のいち日寒し机に坐りて
バゲットは東京銀座の木村屋が良しけふ書展に行く娘に頼みぬ
リハビリ師と歩く散歩みち新緑の大島桜にふく風やさし
大塚照美　兵庫

吹奏楽きこえて寄りゆくコンコース学童はみな黄のシャツを着つ
歌つくる合間にひと息いるる午後ふきよせ旨し到来の菓子
朝食の前に歌稿をポストまで万歳の空に雲ひとつなく
幾たびか処分を思ひし金の成る木ピンクの小花は今盛りなり
一日二個たぶる卵を買ひに出でいつもの棚にまよふ値上り
箱車の保育園児らけふ街に車道へだてて手を振る幾たり
夫の喪に早ばや届きしお悔み状友が書写なる般若心経
井上槇子　新潟

本堂の飾りやうやく終り来て年越しそばの長芋をする
風やみて大晦(おほつごもり)の夜の卓に子の焼きくれたる鮭の身ほぐす
嵐去り桜名所の駐車場車こぞりてピンクをまとふ
桜花すでに散りたる春祭り気象嘆かず人ら宴す
雪消えの暑き日続く杉木立花粉アレルギーの早も兆しつ
笑ひつつわが欠点を言ふ夫機嫌良きとぞ子らは話すも
雨のなか畔草を刈る老夫婦顔あぐるなくひたすら進む
中村哲也　宮城





風に乗りベンチに落ちたる花びらの上には座せず電車待ちたり
初に乗る武蔵野線に向かひ合ふ人等のマスクに安堵を思ふ
上松戸駅に迎へる弟の少し太れりやや五年振り
肌寒く思へる上野の公園を外つ国人等が半袖に行く
久に行く博物館はたまたまか外つ国人等の姿多きは
展示せる物に添へらるる説明板見辛く思ふは眼鏡の故か
道端のソメイヨシノはなべて散り枝垂れ桜の華やぎを増す
吉田佐好子☆　茨城

筍の急成長には舌を巻く気付いた時にはすでに若竹
掘り立ての筍の皮剥き始めようやく柔いところに出会う
皮剥いた筍の根元イボイボは草間彌生のドット柄に似る
夜の庭こちらを見つめる気配ありライト当てれば狸のいたり
野良たぬきぽん太やタンタン適当な名前で呼ばれご馳走に預かる
リサイクル朝仏壇や神棚にお供えしたものたぬきのご飯
中島千加子　東京

祖母に似る雛はいつも胸の奥いつでも会へるあの微笑に
吾のことを忘れてしまふ母となる「疲れた」口癖は変はらぬままに
「疲れた」は母の口癖きくたびに悲しくなつた幼き日から
まだ癒えぬ痛みに耐へて膝抱ふ介護できねば帰る場のなし
夢二描く赤き服着た少女見て吾(あ)に似てゐると言ひし日のあり

読まれずともよしと思ひて母宛に夢二の絵葉書ポストに落とす
マタイ書を読みてノートに記しゆく思ひ患ひ神に委ねて
鈴木　やよい　東京

木蓮の輝く白は汚れきて隣家に落つる花びらを詫ぶ
かうしたいと拙き言葉で伝へれば美容師頷きカットを始む
退院に買ひ求めたるシクラメン回復につれて花弱りゆく
はれやかに桜の下で写真撮る新婦の緞子は陽に輝ける
画帳広げ舞ひ散る桜も気にかけずスケッチする人鋭き目をする
見事なる盆栽なれど枝枝をたわめる針金見るはせつなし
春の陽を背中に受けて草引けば目の前の土に蝶の影飛ぶ


**第62回　冬雷大会**
**10月22日開催予定 !!**

＊ホテルルートイン東京（東陽町）
にて調整中です。

**冬雷短歌会**

**第41回 子規顕彰全国短歌大会**
作品募集

（応募要領）雑詠2首1組（未発表作品に限る。何組でも可）。規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページからダウンロード（A4版）できます。必要事項を楷書で明記し、応募料を添えてご応募ください。（郵送の場合は郵便小為替か現金書留、直接持参も可）
（応募料）1、500円（2首1組）
（締め切り）令和5年7月31日（月）当日消印有効
（応募先）〒790-0857 愛媛県松山市道後公園1―30 子規記念博物館内「子規顕彰第41回全国短歌大会」係
電話089-931-2626 FAX089-931-2633 ホームページ http://www.shikikinenhaku.com/
（選者）秋葉四郎　坂井修一　中川佐和子　吉川宏志（※第1回～第40回選者）片上雅仁
（賞と発表）文部科学大臣賞・愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞　後援賞　現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞　短歌研究社賞・角川『短歌』編集部賞・現代短歌社賞
選者賞　各選者　特選3首・秀逸5首・入選15首　※大会当日に発表、表彰
（入賞歌集）応募者全員に1人1冊送付します。（12月末予定）
（大会日時）令和5年10月22日（日）午前10時開会
（会　場）松山市立子規記念博物館　4階講堂
（記念講演）講師　秋葉四郎氏（斎藤茂吉記念館館長）
演題「歌人茂吉―館長十年回顧―」
（主　催）松山市教育委員会
（後　援）文化庁　愛媛県　現代歌人協会　日本歌人クラブ　松山歌人会　短歌研究社　角川『短歌』　現代短歌社　朝日新聞社　読売新聞社　毎日新聞社　愛媛新聞社　NHK松山放送局　南海放送　テレビ愛媛　あいテレビ　愛媛朝日テレビ　FM愛媛　愛媛CATV

＼全国で唯ひとつの詩歌専門の総合文学館／
**日本現代詩歌文学館**

**2023年度 常設展**
宮沢賢治没後90年／『春と修羅』刊行100年
賢治に献ずる詩歌
賢治作品の機軸であり、あらたな詩のことばを切り拓いた「心象スケッチ」への多様な応答をとおして、今ここに浮かびあがる賢治の姿を共有したいと思います。
＊2024年3月10日（日）まで。

**第38回詩歌文学館賞**
【詩部門】齋藤恵美子『雪塚』（思潮社）
【短歌部門】小池　光『サーベルと燕』（砂子屋書房）
【俳句部門】星野高士『渾沌』（深夜叢書社）
《贈賞式》5月27日（土）15時～　当館講堂

詩歌に関する図書や、結社誌・同人誌などのご寄贈をお待ちしております。
〒024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60
Tel：0197-65-1728　Fax：0197-64-3621　E-mail：shiika@shiikabun.jp






# 六月集

隠したき過去みな覆ふ雪白く清きこころに生きむ今日より
梶尾　栄子　兵庫

小春日をソーラーパネルのごと背に集めて畑に草引きてをり
病室に夫と小さく万歳しき大阪大学合格の孫
マイナカード「次回の延期ありません」の広報に混む今日の市役所
去年見たるミモザの黄色忘れ得ず春休み明けに急ぐ中庭
天井の小さき染みに擬態して幼きハエの止まる春先
昼日中熱ある身にても微睡むを怠けゐるごと思ひ来しわれ
晩酌のつまみに喜ぶ夫のため匂ふ銀杏拾ひもしたり
本間　志津子　山形

紅梅は上へ上へと昇りゆき濃き色に咲く冷気の中に
燦燦とわが家の紅梅日差し浴び窓に迫りて部屋明るます
もやもやと三月の街に漂ふは黄砂か花粉か薄日に烟る
掃き寄する枯葉に混じる紅梅の花びらいくつ雨に落つるか
雨上り塀を越え立つ白木蓮今にも咲きさう蕾膨らむ
彼岸過ぎ風暖かき真昼間に土埃あげ車過ぎゆく

紅椿咲く傍らに連翹の黄色の清し通りすがりに
長らくをコロナに籠りやうやくに授かる仕事に孫出勤す
小林貞子　山形

銀嶺の飯豊連峰膨らかにけふ清明の空に横たふ
花便り早も届くとテレビ告ぐ籠編み進む手に春日影
ベランダの手摺に靡く庭木木をばつさりと伐るまう惜しく無し
階段に伸び来る枝の払はれて夕影の中切り口白し
夜もすがら胸の底ひの疼きをりさあ眠らうぞ眠りは薬
雪下の土盛り上げて蚯蚓追ひ土竜その身を養ひをらむ
雪消えて土の小山の数知れず莟を抱くプリムラ埋まる
鳥兜水仙福寿草などのアルカロイドを土竜苦にせず
積雪の下にて長期稼働する土竜忌避器を切に望みぬ
川俣美治子☆　栃木

水を撒くジョウロの中に蟻一匹うろうろするを庭に移しぬ
朝はまだ三分咲きにて帰り道八分咲きなり桜の花は
風吹きて散りゆく桜目で追えば綺麗儚い気持が揺れる
かなめの木春の陽気に酔うように赤き新芽が風にゆらゆら
美容院に切りたる髪に白多く鏡の中の我苦笑する
夜が更けて降り始めた雨寂しくてテレビのボリューム上げて落ち着く
亡き父母が植えたる椿を仏前に今年もきれいに咲いたと一輪





ひといろに並木をおほふ花に降る雨のしづくを傘に聞きをり
内垣米子　千葉

大株に丈高く咲くたんぽぽの花と蕾と三十あまり
細き枝の木五倍子（きぶし）ついばむ鵯はおのれの軽さたのしみてをり
たてがみのごとくに垂るる木五倍子のはな逆さになりて啄むひよどり
強風のままに暮れたるけふは望見上ぐる月のなんと金ぴか
二十五度夏日の報に薄着して何やら涼し春の夏日は
あちこちに見掛くるナイキのロゴマーク佐々木朗希のグローブに見つ
桂剝きの大根の皮まとめおき作るきんぴら夕餉の一品
藤田英輔☆　高知

処分すると決めて積み出す八年を受け留めくれたるソファー破れて
スマホにて二人並んだ写真受く生受けて二時間の子とその母の
厚き雲去りて日射しは暖かく模様替えしたる空が広がる
コーンの皮で作られたる人形は勇敢なカウボーイを待てり
面会は幾月振りか母の身は歩いているか覚えているか
児玉孝子☆　愛知

供えてと姪の呉れたる章姫を飲み門におとすは惜しと味わう
世界一侍ジャパンに湧く列島吾も釘づけ勝利の瞬間
「憧れを捨てて勝とう」と大谷の選手に告げる言葉のちから
桜咲く寺庭に集う「そばの会」花を愛でつつ仲間明るし

家康の敗れ逃れし大樹寺に敵払いたる僧の閂をみる
無造作に水仙いろいろ差したるを眺めいただくゆとりの夕餉
何気なくテレビつければ「水戸黄門」夫の好みを久久に見る
江　藤　ひさ子　大分

芽吹く嵩去年に勝れる鈴蘭に屈むしばらく花を思ひて
丈高く咲く木蓮を仰ぎゐる頬を掠めつひとつ花びら
佛檀に床の間玄関洗面所トイレにも挿す庭の水仙
強風に光を返し石蕗がその葉を揺らすつつじの根方
庭石に小刻みに鳴くそのリズム餌を欲るらし一羽の雀
昨日は夫とけふまた友と川土手の桜並木をゆつくり歩く
吉　岡　松　世　愛知

五十年ごくらうさまと靴みがく最後の勤めにでかける夫に
こんなにも嬉しい散歩はないだらう「月が綺麗」は感謝のことば
老いる日のせつなさ思ふなつかしき「ドライビングミスデイジー」観つつ
あの頃の子供の声が聞こえくる大掃除する子供部屋から
小　嶋　知　葉☆　茨城

わが体メンテナンスが急がれて十四日間の入院となる
夫の言う「君はほんとに丈夫だね」が帳消しとなる七十八歳
家事うとき父親のこと心配とキャリーバッグ引き娘が来たる
病室の窓より見ゆる満月をゆったりながめ回復を待つ





ようやくに手術の結果良好と言う医師の笑顔がぼやけて見える
入院の体験者なる先輩のラインのことばしみ入る夜更け
名古屋より息子帰りてさり気なく「ういろう」を置くわが手に「はい」と
雑草の伸び始めたるわが庭にキリシマツツジ真っ赤に咲けり
鈴　木　計　子　東京

祖父よりの卒業記念の計子印いまも使ひぬ実印として
リハビリに通ふ医院の静まれり記録的なる寒波の豫報に
小麦粉をこねて四五〇日ねかすと記すくず餅食べぬ
くず餅の消費期限は二日とぞ四五〇日ねかせたる後
小麦粉のくず餅はじめて今日食べつこれが江戸より伝はる味かと
マタニティマークに気づき席を立つ微妙なふくらみ見ゆる人ゐて
袴にて眠りゐる人振袖の袂が床に垂れてゐますよ
西　村　邦　子　兵庫

友ヶ島どこか懐かし風の吹く船着き場に近づきくれば
遠き日に揺れる小船ではるばると来たる友ヶ島海水浴場
要塞が今も残れる友ヶ島十二歳の記憶はおぼろ
アルバムの白黒写真に父の文字「夏の想い出友ヶ島にて」
戦争を知らぬ三世代友ヶ島の古き要塞探索をする
女孫たちはインスタ映えすと写しゐるレンガ作りの砲台跡を
小犬乗せベビーカーを押す人に引かれゆく犬足並そろへて

# 残響集

佐々木　政　子　岩手

関東に桜の咲きて春となりわが住む陸奥は小雪ちらつく
ベランダに立ちて仰げる夜の空ほそく鋭き月移りゆく
青天に誘はれふらり出でて来ぬ白く見ゆるは山桜かも
道の辺の切り株に腰を休めをり栗駒山（くりこま）の雪輝くが見ゆ
面識なき媼なれども休むわれに話しかけゆく田舎よきかな
古里の友の周辺みな逝きて淋しと話す人事にあらず
日の沈み栗駒山の上空を朱色むらさき明るく染むる
卒寿すぎ施設へ移らむ思ひあり決断つかず日々過ぎゆきぬ

井　出　裕　子　静岡

友の田によもぎ生ふると知りたれば摘ませてほしいと早速電話す
幼な時によもぎを摘みに田の土手に母と行きしこと思ひ出さるる
草にほふ深き緑のよもぎ餅きなこまぶして仏に供ふ
作りたる団子の写真送信す友への感謝の言葉をそへて
あまりにも桜の開花早まりて旅行日変へると連絡が来る
鶴ヶ城満開の桜に賑はふも飯盛山は遠くかすめり
三春桜数本の柱に支へられ千年の命をピンクに染めをり





羽　田　孝　輝　山形

梅桜辛夷も咲ける春の野は雪を纏ひて朝日眩しき
桜咲き田起こし始むる穀雨前野に一面の雪景色あり
苔むして倒るる桑の老木に様と呼ばれし蚕思ひぬ
をちこちに雪まだ残る春の野に勢ひ流るる沢音寒し
今日もまたニュース速報見入りをりミサイル発射にもう慣れた春
春浅き林に咲ける辛夷花残れる雪と白さ競へり
春彼岸入りは一人で来たる母明けには朝に父を連れ行く

金　子　八重子☆　千葉

うつ向いて春を探した時の有り二十年経て桜見上ぐる
そこそこに花は見たからまあいいか桜の見頃を邪魔する長雨
水玉のスカート良いねと言いたればドット柄だと孫の修正
和服着てスニーカー履く女性居りなんて時代だこだわりを持て
通勤の往復に読む冬雷誌車中に居ること忘れて笑う

首　藤　文　江☆　埼玉

参道を風に向かいて歩き来て願い噛み締め甘酒を飲む
具だくさん味噌汁作り気に入れば野菜にぎわう祭りのように
暗やみにかすかに光る家の前去年のままのイルミネーション
食べたくて一気に走ったカフェにてもう終わったと言われるサンド
世界一何回見てもいいねと言い酔いて痺れるベースボールは

（☆印は新仮名遣い希望者です）

## 四月集／残響集評
### ブレイクあずさ

如月の尾根を歩けば吹く風の春を告げゐるやうなぬくもり　益坂順子

流れるような上の句が吹き渡る風のようである。後半の句またがりも効果的だ。

軽々と飛び回り遊ぶ保護猫を我が老い猫と共に見てゐる　東ミチ

疲れ知らずの若い猫を苦笑交じりに見守る作者と老い猫。こちらは長年のコンビらしく、息が合っている。

銭湯が更地となりて早二年ここを愛した爺達も亡く　植松千恵子

言い切ってしまわない結句に失われたものへの哀惜がこめられている。時の移りはなんと速いことか。そんなため息も聞こえてくる。

元旦の空気つねより澄みてゐて烏のこゑの遠く響けり　鈴木計子

忙しい東京もさすがに元日は静かになる。普段聞きなれているはずの烏の声にも特別感が出て、心もしゃんと改まるようである。

文旦の黄の実朝陽に光りおり墓地への細道曲がりたる時　藤田英輔☆

冬枯れの特に寒い時分に出会う黄色は、太陽の分身のように感じられるものだ。思いがけず目に飛び込んできた実にほっとしている。

売られゐるコールダック寄りきたり声をかくればそのたび応ふ　内垣米子

人なれしているアヒルがいじらしい。売られる己の境遇をわかっているかのようなしぐさも何か哀れを誘う。

子を胸に荷物は肩に傘を手に若き母ゆくは戦士にも見ゆ　須藤紀子

子、荷物、傘と重ねて、若い母親の奮闘ぶりを浮かび上がらせている。「戦士」という表現は作者からのエールだ。

すぐ書かねば忘るる歌のために置くメモと鉛筆少しづつ減る　井上法子

「少しづつ」の地道さ、そして確かさに、短歌を作る人なら大いに共感を覚えることだろう。

寒緩む横断歩道に落とし物紺の右手の手袋ひとつ　小田原禮子

落ちている手袋というのはなぜかいつも片方だけ。「紺の」「右手の」とぽつぽつした描写、そして「ひとつ」と終えるところに物語を感じる。

熱湯に早どり若布くぐらせる手品のやうにぱつと緑に　津田美知子

岩手の早どり若布は、一年のごく短い期間、そしてほぼ地元にのみ出回るのだそうだ。鮮やかな色に心躍る様子が伝わってくる。

なつかしき父のやうに待つてゐる入り江の小船陽にゆらゆらと　松﨑みき子

静かな海に浮かぶ船にそそぐ光は北の海にも春が近いことを告げている。「父」はきっとゆったりと構えた明るい人であったのだろう。

小雪舞う寒風に立つ桜木の枝先にのる春待つつぼみ　猿渡憲子☆

連作の終わりの歌であり、作者の抱える深い悲しみが感じられる。冷たい風にじっと耐え春を待つ樹に、作者は自らの姿を重ねている気がした。



## 四月集／残響集評
### 大山　敏夫

銭湯が更地となりて早二年ここを愛した爺達も亡く　植松千恵子

銭湯を愛した方々はきっと多かったと思うが、結句の「爺達」は作者と親しかった面々なのだろう。たぶん作者も密かに愛された場所だったという雰囲気があり、古いものが次第に姿を決してゆき、そして知人も一人欠け二人欠けと居なくなる儚さ、寂しさを歌っている。

宛名書き百七十通の通知状一人一人を想い浮かべて　石渡静夫☆

大変な数を自筆で仕上げてゆく作者。下の句にその思い入れが読み取れる。デジタル化への波はとどめ難いが、アナログの素晴らしさを十分に知る作者だ。

一つだけ実となる庭の獅子柚子が色づきはじむ師走となりて　鈴木計子

獅子柚子は鬼ゆずとも言われ大型で表面がゴツゴツしていて、邪気を払うとかと尊ばれ観賞用にもなる。作者の庭にも植えられてあるようだ。一つだけ実ったとあり、大切に見守っている姿が感じられて微笑ましい。

サッカーにかける小五に地球儀をプレゼントする世界をめざせ　大野　茜

地球儀ってぐるぐる回して眺めているだけで結構楽しいが、それを小五のサッカー少年に贈る。結句には作者自身の夢と期待も籠められている。

今年からラインにて来る年賀状いつもと変はらぬハガキのかたち　吉岡松世

デジタル時代だなと思うが、画像で実際の年賀葉書を模したという所が観ているところ。紙には出さないけれど、書く側の心は温かく伝わるだろう。作者もほこほこしている感じがよい。

高音の出でずなりたる加藤登紀子やはりさびしくチャンネル変へつ　内垣米子

懐かしの曲を昔の歌手が歌う番組はちょくちょくあるが、多くはその姿かたちの変化（自分のことを棚にあげて？）に驚くのだが、作者は一歩突っ込んで声の調子の変化に気が付く。きっと好きだった曲であり歌手だったのだろう。「やはりさびしく」には避けては通れぬ歳月の重みを実感する溜め息が聞こえる。

寝つかれず本を開けどすぐ眼疲れて長く続くことなし　井上法子

下の句の状態が睡眠へ向かわせるなら予定通りなのに、どうもそううまく行かず眠りは来なかったようだ。睡眠をコントロールすることは本当に難しい。似たような状況なのでよく分かる。

夫婦して植えた記念樹南高梅今は一人で花を楽しむ　谷田律子☆

家庭の歴史を庭の南高梅を見ながら思い出している。下の句は、さびしいことに違いないが、「花を楽しむ」という前向き感で捉える。

なつかしき父のやうに待つてゐる入り江の小船陽にゆらゆらと　松﨑みき子

あの大震災の大津波で失った漁師の「父」であろう。作者はいっときもその姿を忘れることがない。入江に浮かぶ小船は若き日の父と作者の姿を呼び戻すのだ。「ゆらゆら」が切なく響く。

# 萩原千也を読み松倉米吉を思う(2)

大山　敏夫

## ■「職工」という語

萩原千也が回想して自身の結婚を詠った平成十八年の作品、

職工われに縁談を齎(もたら)しくだされし新貝雅子さん逝かれしか

が気になってならなかったが、辿ってみたら翌十九年にも、

アララギの大河に入りし職工に「ハギワラ君」と親しみくれき

という歌もあった。これは「アララギ」の先輩吉村睦人を慕い思う一連の中にある。又この頃には次のような作品も見える。

勝ち組負け組などたやすく言ふ御仁(ごじん)おのれは勝ち組にゐるつもりらし

こうした反骨の姿勢も萩原短歌には多く、この歌の「御仁」の様な上から目線において「職工」の語も使われることがある。この頃はすでに差別用語なども煩く指摘されるようになっていたかと思うが、「職工」はそういう指定は受けずともメディアが自主的に規制する「放送問題用語・放送禁止用語」には入れられていたのではないだろうか。萩原の言う「職工」が、二首のいずれにも、自身の職業を必要以上に卑下するかに聞こえるのが気になる。なぜ萩原は、こう詠うことを選んだのか。普通に「職人われ」とか「箪笥職われ」となぜ発想しなかったのであろうか。

仮にそれを本人が言い気にせぬそぶりでも、聞いて不快を覚える人が多数居るから「放送禁止用語」として自粛される。ゆえにアララギ誌上での矢田信雄も「手職の人」の語を選んで批評していたのだと思う。

日本の近代史の中では、文明開化直後の明治十四年ごろ「職工学校」なるものが全国的に設立された。名称にはやや違和感があるが、この時代の「職工」には現代での意味はなかったようである。その中に「東京職工学校」があり、「職工学校ノ師範若シクハ職工長タル者ニ必須ナル諸般ノ工芸等ヲ教授スル」という位置付けが与えられた。後の「東京工業大学」となっている。

ちょっと硬い話になってしまったが、「職工学校」なる名称がすぐに「工業学校・高等工業学校」と改称されて行く過程には、背景に「職工」の語の持つ意味合いの変化があったと想像される。

土屋文明にも「職工」を歌う作品がないわけではない。その二首、

われをみしは造兵廠(ぞうへいしょう)の職工(しょくこう)か目もあわただしゆきすぎにけり

（『ふゆくさ』大正六年）

花岡(みかげ)白き橋脚(きょうきゃく)も灯(ひ)を列らね点(とも)し歩道にあそぶ職工と幼児(おさなご)

（『少安集』昭和十五年）

一首目、武器・弾薬などの設計・製造・修理などを行い、軍隊直属の兵器など精密工学の生産工場が造兵廠だから、そこで働く職工を捉えても現代で言う職工とは違い高度な技術職の印象を受ける。

二首目の勝関橋は、この年に開通した。国家的イベントとして計画された万国博覧会のメインゲートとして計画されたのであるが、その橋脚には高価な花崗岩が使われ華々しい。その近くの歩道にあそぶ職工と幼児は親子だろうか。見るからにそれと分かる服装をしていたのか。ほのぼのした平和感や高揚感がある。共に現代の「放送禁止用語」等の視点からの感想を持ち得ない作り方になっている。

文明の一首目が生まれた大正のはじめ頃、松倉米吉は東京本所で働いていた。そして次のような歌を作る。

わが握る槌の柄減りて光りけり職工をやめんといくたび思ひし

（大正三年作）

米吉も「職工」と自分を歌う。この作品の「職工」にはたぶんに卑下の念が籠っているふうだ。文明作品の造兵廠の職工とは随分と趣の違いが感じられる。よく云われた３Ｋ（キツイ・キタナイ・キケン）の環境も今に変わらず、

日もすがら金槌をうつそこ痛む頭を巻きて金槌を打つ

指落しし男またあり吾一人煙草休みに日を浴びて居り

工場に仕事とぼしも吾が打つ小槌の音は響きわたりぬ

指落して泣いて行きし友のうしろかげ機械の音もただならぬかな

真鍮の粉の沁み光る吾が指を日にかざし見つひとりかなしく

と具体的に事実に沿って詠った作品もある。社会の景気は良くなくて仕事量も少ない。薄い日給のような立場の仕事では生活も厳しい。この時代に米吉と同世代で交友した早川幾忠も『松倉米吉と行路詩社』（短歌新聞社刊）の中で「一人の人間を、乞食すれすれに置くのがベースであつて、それでも別に腹をたてる者もなかつた。」と悲惨な状況を書いている。早川は又この頃を回想して、しばしば「三等市民だ」「四等市民だ」というふうに自分達を揶揄気味に分類している。こうなると背景には、「語」だけではなくて、階層的な差別の様なものがほぼ公然とあったのかと思う。

「職工」という語に特別な意識を持つわけでもない萩原だが、その作品には自身の労働の様子を詠うもの、仕事で汚れた指先をなげくようなもの、機械で指を落した友の歌もあって、米吉に極めて似ている。だが根本的に違うのは、萩原には「職工をやめん」という米吉の嘆きが無いことである。ゆえに自らを「職工」と言ったとしても、そこには卑下とは違う何かがあるのだろう。米吉の言う「職工」を考えると、絶望も怒りも嘆きの涙も抱合されていて未来が感じられないほどだ。

## ■文学への志向

松倉米吉の年譜に沿えば、明治四十四年の十六、七歳に於いて既に文学への志向をかたちにしている。

三月、マルエム工場内において同僚の戸塚恒司、前橋喜久男と相識る。六月、文学、短歌を勧められる。七月、この二人と共に回覧雑誌「青年文壇」を発刊す。それより毎月に及ぶ。これそもそも「行路詩社」の前身たりき。

「青年文壇」とは随分大きな名称だが、短歌という限定ではなく広く文学をめざした意図は威勢がよい。これは手書きの回覧雑誌で部数極少であろうし今に残ってもいない。翌明治四十五年（大正元年）には、「芒星」と改称。会員数も七、八名に増えている。さらに翌大正二年には、早川幾忠も参加し、早川主導で「アカツキ」「カハタレ」「蹟」と改称され、「行路詩社」となる。「蹟」以降が活版印刷によって作られている。当時十九歳であった早川は回想する。

「青年文壇」がヤボなのは、大躰がさう言ふヤボが常識の時代だからで、この中にマルエム少年の風味がある。「アカツキ」「カハタレ」は七五調臭で、「蹟」がなまかじりのベルグソンで、「行路」に至ると、放浪趣味が若干まじつてゐる。

（『松倉米吉と行路詩社』）

早川は「仲間の中で一番キザであつた」のが自分だったとして、この活版印刷への踏切り事情、そのやり方を具体的に述べて、驚きを伴う、あるいは滑稽で笑いさえ誘う有様を綴っている。それは想像を絶する様子で、まず必要量の活字の分だけ買い求めてくる。それを活版印刷の見様見真似に、ブリキを買い木切れを買い、菊版の箱を作りブリキを敷いて活字の高さに合わせる。そして活字を並べて組む。インキを擦りつけるローラーは木の棒にラシャを巻いて作ったとある。紙をのせていろいろ試しながら、ついには梃子の理屈に思い至り、人力によるプレスの技をやっとの事で身につける。

こういう作業に米吉も参加していたのだ。これを大真面目で実行し、手作り雑誌を作るなど今では考えられないだろう。これが若さであり、言い換えればそれだけ強靭な文学への志向のなせる姿なのだと思う。

私事を述べると、私が二十歳の頃に編集発行した雑誌の名が「日本青年」で、考えてみると「青年文壇」に良く似た名だ。早川が『松倉米吉と行路詩社』を上梓したのが昭和四十五年なので、この本が生まれる少し前にあたるが、早川から一枚の葉書を賜った。この「日本青年」の名が早川に青春時代を思い出させたようであった。

萩原千也も高齢者となってから自身の全歌集を手作りで制作していて、様々な工夫も道具の吟味にも骨を折ったかと想像される。しかし、十代においては、米吉らの起こした雑誌を核とする作家活動というものとは全く違う道を歩んでいた。萩原は新聞歌壇に投稿することによって選者土屋文明に見出され、ひたすら選者を信じて作歌し、選評を励みとする「投稿家」としての自分に満足していた。言い換えれば米吉は飽くまで文学としての短歌をめざしながら、その為の生きる手段で「職工」をしていたのであるが、萩原は、箪笥職人としての確立をめざしたので、そこから生れ出るものには「箪笥職人の作る」という形容詞付きの短歌になる。これは明らかに違う営為であり、単純に並べられるものではない。萩原自らがその中核の一人として雑誌刊行に尽力するのは、三十代に入る頃の「ポポオ」創刊以後の数年に限られている。

松倉米吉らの「行路詩社」を思えば、そこに寄り集った数人の中でさえ、相坂一郎は「青垣」、高田浪吉は「川波」、広野三郎は「久木」そして早川幾忠が「高嶺」というふうに後に短歌雑誌を起こす才能が切磋琢磨して熱く交わって居た。箪笥職人になろうと必死に働き、住込み奉公の仲間の中で隠れるように灯火の如く短歌を作って居た萩原とは、やはり違い過ぎる。

「アララギ」で萩原と共に学び、米吉の仕事に通うような旋盤工場に勤めていた齋藤彰詰は、米吉にも一方ならぬ関心を示し、雑誌「ポポオ」に本格的な松倉米吉論を数年にわたり連載した。米吉作品への理解の深さには感じ入ったが、その中で私が注目したのは、米吉を襲った文学への目覚めであった。

齋藤は、母と別れ一人預けられて暮らした米吉の糸魚川時代において、郷土の文学者相馬御風の存在を意識し刺激を受けたのではないかと展開する。御風は「あるいは、米吉と同じ糸魚川高等小学校に学んだのかも知れぬ」とも書いている。そこで、調べてみるとその通りであった。御風はちょうど一回り上の世代で、現在の県立高田高校を経て早稲田へ進み、在学中に岩野泡鳴らと雑誌「白百合」を創刊。二十二歳時に歌集『睡蓮』を出している。歌人としての活動は比較的目立たないものの、早稲田の校歌「都の西北」をはじめ、流行歌「カチューシャの唄」や童謡「春よこい」の作詞者だとなると誰もが知っていることであろう。

そういう大物の先輩が米吉少年の非常に近い場所に存在していたのである。歌集『睡蓮』の刊行時には米吉も十一歳となるので、その評判等は、ちょっと耳敏く早熟であれば聞こえていて不思議はあるまい。文学をやるには、やはり東京でなければならぬと米吉少年は思いつめたのかも知れない。年譜には次のようにある。

明治四十年　十三歳

三月三十一日、高等小学校退学す。後、母を追ひて上京。本所区北二葉町日毛氏の家に寄寓す。日毛氏は当時東京毎日電報者社員にして、母つぎは内職に裁縫を教授す。此頃一ヶ月余りメリヤス製造業某店へ奉公に行く。

（続）

（＊本文中の敬称等は省略させて頂きました。）

第三十七回
全国短歌フォーラム in 塩尻

短歌と出会えるまち「塩尻」。
短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

投稿歌募集　申込締切 6月16日（金）

■応募規定　一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首（どちらか一首でも可）
題詠「本」※投稿は自作未発表作品に限る
■投稿料　1,000円（一人あたり、一首二首同額）
■作品集代　1,000円（希望される方は投稿時にご注文下さい。）
■応募方法　所定の投稿用紙か400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号を記入し送付ください。
ホームページの応募フォームからも投稿できます。
https://tanka.shiojiri.com/
※ご連絡くだされば募集要項（投稿用紙）をお送りいたします。
■払込方法　定額小為替（郵便局で購入）を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」にお振込下さい。

■申込締切　2022年6月16日（金）（当日消印有効）
■主催　長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／全国短歌フォーラム実行委員会
■選者　佐佐木 幸綱 氏・永田 和宏 氏・小島 ゆかり 氏
■賞　最優秀賞・優秀賞・入選・奨励賞
■発表　作品集と全国短歌フォーラムホームページ
■申込先　〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3 全国短歌フォーラム事務局 電話 0263-52-0903（直） ファクス 0263-53-7604

～お知らせ～
近年の大会への参加状況などを踏まえ、第37回大会から、会場での大会は開催せず、書面開催とすることに決定致しました。これまで開催に御協力いただきました皆様、御参加いただきました皆様に深く感謝申し上げます。
なお、投稿歌の募集と選考、作品集の作成などにつきましては、これまでどおり行いますので、皆様からの御投稿を心よりお待ちしております。

## 四月号作品二評

桜井美保子

気掛かりの事柄ひとつ解れたる電話の後にうどんを煮込む　小林芳枝

心を悩ませている事柄が電話での会話で解決したのだろう。ほっとして食事の用意をしている様子が見える。結句への展開が鮮やかである。

長旅をして来し鴨の強靭さ見えず静かに池に浮きゐる　梶尾栄子

確かに野鳥は強靭さを秘めているのかもしれない。しかし、そうしたことは少しも思わせないような静かな姿に作者は目を留めている。

牛をりて農のたづきの立ち行きし黒き巨体の父の相棒　小林貞子

父の農業を支えてくれた牛を思い出している。その牛を「父の相棒」と詠んで親しみを込めている。作者にとっても懐かしい日々なのだろう。

その時季を違はぬ庭師脚立たてて花終はりたる山茶花を切る　江藤ひさ子

その樹木がこれからも良い状態で育つよう、剪定の時季を見定めた庭師。その的確な仕事ぶりに全幅の信頼を寄せている。引き締まった調べである。

最高齢で出演するに不安あり舞台に五分前深呼吸す　児玉孝子☆

一年間練習された踊りを披露された。舞台に出る直前の緊張が伝わる。出演者最高齢での挑戦が素晴らしい。

初雪のあたり一面覆ひみてメルヘンチックな街となりたり　山本述子☆

街の風景が初雪のために一変した。たちまちメルヘンチックな街となった驚きが感じられる。

未だ葉の出ぬバラの枝暖かな二月初めに棘のみ目立つ　豊田伸一☆

春の足音が聞こえるまでには、あともう少しという時季。二月の光の中で成長するバラの枝を端的に捉えている。棘に着目したところに作者の個性が光る。

支部会で一日一首と話されし天野さん巻頭五十首に声聞こえくる　廣野恵子☆

多摩支部会で活躍されていた天野克彦氏は現在大阪にお住まいである。第五回冬雷賞を受賞され、五十首詠が二月号巻頭を飾った。その作品を読んで支部会での氏の話を思い出された。「声聞こえくる」に懐かしさと感動が籠っている。

雪は止み傘を杖にして帰途につく無事に終へたる乳がん検診　松居光子

雪で足元が大変な中を乳がん検診に行かれた。その結果が良かったのだろう。雪が止んだ街を帰ってゆく様子に安堵の想いが出ている。

この店の寿司の味知る吾なれば特売の運しあはせの運　齋鹿ミヤコ

美味しいものが特別安く買えるのは家計を預かる主婦には嬉しいこと。特売に巡り合うのも「しあはせの運」と詠む。読者も思わず笑顔になる歌。

夕食のいつもと変わらぬハンバーグ器を変えてごちそうになる　大塚雅子☆

料理の器を変えるという工夫で美味しさが引き立った。日常の小さな発見を大事に飾らずに表現しているのが良い。



## 四月号作品二評

町田　勝男

「卯は跳ねる」の言葉を引きて期待する声あり卯は荷の重からむ　梶尾栄子

後続車に何と思はれゐようとも朝霞深きをそろそろ走る　〃

新年の干支に掛ける期待のほどは経済界ほど大きいのは例年のことですが、今年はその期待を裏切って証券業界などはガックリです。干支にかかわらず冷静な判断力を問われるのはどの業界でも同じです。2首目の感覚も同様です。安全運転でどこまでもゆきましょう。

白銀と言ひて白魔と呼ぶ雪を憎み切れずよ白は美し　小林貞子

白銀は歌を詠む常套句です。一面の銀世界は白紙よりも白ですね。筆者も仙台に行った時しか味わうことはありませんが、これはほんの欠片ですね。山形の雪は同僚数人から聞いているだけですが生活にはさぞ深刻な影響があることでしょう。しかし「住めば都」の言葉も真実を表現していることも事実です。白より美しいものはありませんから。

久々に孫たちと会い食事するばあばはあばの声心地良く　川俣美治子☆

久しぶりに会う孫達との会食どんなに楽しいでしょう。久しぶりだからこその家族の雰囲気、一緒に住めば気に入らぬこともあるだろうに。その嬉しさが行間から滲んでいます。

干支根付け寅年生まれの十二歳少し顔立ち似たるを選びぬ　西村邦子

十二歳の女孫か男孫か顔立ちが似る根付けがあったのか？　すべて推量で読む他なしの詠みですが、勇ましい虎に似た根付けが有ったことにしましょう。惹かれる何かがあります。

今晩のメニューに悩まなくていいただそれのみに恵方巻を買ふ　松居光子

食事担当の主婦の心持が素直に詠まれて秀逸。家事円満夫婦円満の言うことなしの作者だからこその作品、筆者には真似のできない家庭の経営者ですね。

甘いもの嫌いじゃないが糖尿病予備軍と言われすこし控える　安川敏子☆

詠まれた歌の糖尿病予備軍のことばにピンときました。筆者自身が予備軍で薬に依る治療をつづけているからです。わたし自身はそんなに大酒飲みではないし、甘いものにも目がないと言うほどでも無かったのですが、血液検査の結果を突き付けられて有無を言わさず炭の粉を固めたような薬などを飲んでもう五六年になります。透析が怖いからです。

ウクライナに戦車を供与する大国は戦争煽るか何かが違ふ　野口秀子

毎日のメデアの報道で遠い国の戦争も手に取るように理解する我々ですがその本質的なものまで理解が及びません。ウクライナの大統領は何が無くても自由主義陣営の協力で停戦や休戦には応じようとはしません。他の外交的な努力はしているものとは思いますが、古い武器や在庫の弾薬が尽きたら戦争は終結に向かうものと筆者は思っていたのに、作者のように何かが違うと思わざるを得ません。「武器よさらば」とはならないようです。

# 作品二

ひとり来て石のおもてを拭きてをり彼岸のまへの平日の朝　小林芳枝　東京
この墓は西方浄土に向いてると言ひし人ありき納骨の日に
回り道して花を買ひたる店も墓もわが家より徒歩数分の距離
草生ふる隙間なく並ぶ墓石の隣の人に合ふこともなく
両端と高さを揃へたいといふ石屋の望み適ひたる墓
屋根越えて枝垂桜の咲きし家しばらく空地のち駐車場
工場の跡地の広き駐車場ひとつの隅にコンビニ出来る
古びたる工場のある町だつた八百屋魚屋豆腐屋が来て
牧水の歌につながる町の名に節などつけて口ずさみたり

「九十分並んで買つた」とキャラメルのクッキー卒業旅行の土産　益坂順子　福岡
ラインにて「好きな色は？」と問ひきたる翌日届きぬ花束となりて
地に届く程に倒れて咲く花の冷たき雨に耐ふる水仙
庭畑に数株残る春野菜あつまりて咲く小き黄の花
ふるさとの筍は旬 竹林に足踏み入るる鍬を担ぎて
多良岳といへば先づ咲く万作を見むと意気込む春待ちわびて





不規則な石段続く中腹に身体の求むアミノバイタル　須藤紀子　埼玉
二十キロのザック持ちたる高校の山岳部といふ子等に越さるる
配属は山岳救助隊といふ研修終へたる孫の仕事の

新しき本を買ひきて新しき本の香りに暫し満たさる　石渡静夫☆　茨城
木々たちが新しき衣纏ふゆゑ我も購ふ春の衣を
啄木鳥が新居を作る音響き一所不住に心誘はる
鳥は鳥の言葉を交はす三月に誰にも会はぬひと日暮れゆく
蒲公英の群れ咲く中より飛び立ちて視界を過り黄の蝶は消ゆ
浮遊する紋白蝶と黄の蝶が一瞬触れあひまた離れゆく
剪定の薔薇の枝先貰ひ受け挿し置けば芽吹く春の陽気に
大陸の砂漠の砂を巻き上げて国と海とを風は越えくる

みんなから一人踊りの指導受け今日は舞台へ「淀の舟唄」
スタートは二呼間聞いて歩き出す敢えて四呼間落ち着いて出る
休憩の時間を惜しみ司会者は舞台の袖でギターをつま弾く
役員の立候補無く議事止まる役員改選次回に持ち越し
それぞれの役で働く人がいて組織は動く感謝を忘れず
会長の指名で役員次々と決められていく拍手と共に
突風が黄砂を運び濁る空洗濯物は逆上がりする

三か月開脚続け吾が顎は床に着きたり目標達成
東　ミ　チ　青森

手の平を返すが如き天候に冬のなごりの風に縮こまる
一人居の気楽さなれば懐メロのテレビに合はせて声はり上げる
どちらかと言へば慎ましく暮しゐるが子は吾をそのやうに見てをらず
袴田事件の再審決まり姉ひで子さんの信念報はる
弟を信ずる心に揺ぎなし姉ひで子さんの笑顔日本晴れ
大輪のダリアの球根植ゑる庭の土掘り返し元肥を鋤き込む
要支援「2」の査定が出るも吾がのぞむ手揉みマッサージの施設無し
長生きの時代の波に乗りながら夫と子の回忌法要を相済ます
早乙女　イ　チ☆　栃木

買物にでかけようかと定休の孫にさそわれる静かな朝に
足利の方へ向かって走りゆく欲しい物あれば買ってやるよと
薬局を見て行こうかと言うほしいのはやっぱしこれだポリデントね
キンカンが黄色くなって朝の日に映えて一つ取り食べればあまい
植　松　千恵子　静岡

伊豆巡礼御朱印集めに付き合ひて来たる山寺みごとな天井絵
床下の物入れにある数多の茶碗捨てるに惜しい義母の遺品なり
葬式も法事も家で取り仕切る義母は食器を揃へてゐたり
遠き日に雛段前に孫を抱き親子四代写真を撮りき





写真の孫は大学義母は逝き吾は白髪雛の日の過ぐ
春闘は大企業アップで決まりたり大手支へる中小厳し
タンポポの綿毛一本吹いてみる種を運びて飛べ思ひ切り
卯　嶋　貴　子☆　東京

気持ちよい南風うけて木が芽吹きサクラ花散る中をドライブす
雉鳩一羽わが庭に来てガラス戸を開けても逃げず餌を啄む
劣化する身体と戦い毎日をわがままに生きる八十歳の吾は
豊　田　伸　一☆　茨城

桜草陽差しを浴びて地にひくく揺れて美しピンクの花が
桜草一面に咲く春の庭花を眺めて今日もたのしむ
雨あがり蛙鳴く声高らかに深夜に響く春の訪れ
バネ指の痛さに耐えてきたけれど手術日決まり不安になりぬ
里帰りの娘親子はあいさつし帰りぬ駅まで妻が送りて
アスパラガスの驚くほどの大きな根横に広げてねかせて植える
横　田　晴　美☆　埼玉

五分咲きの桜を見に行く空晴れて何も持たずにヨタリヨタリと
公園のベンチに座る老二人に一人加わり花見賑やか
花の下ジュース片手に手を伸ばし微風にゆれる花びら数う
「その足で歩いて来たか」一枝を手に持たされて花びらゆれる
賜われる細き桜の一枝が居間に咲き誇る七日過ぎても

向かい合う友の後の仁淀川窓越しにブルーの水流れいて
仁淀川の川面に淡く映り込む山の斜面に咲く山桜
この春も咲いているらし空き家なる生家の庭のぼたん桜は
支え合い健康長寿を生きたりし祖父母の浮かぶ生家の花便り
百五歳に旅立ちし祖父二年後に祖母も逝きたり百五歳にて
穏やかな大往生にあやからんと賑わう酒席夜に入りても

川上美智子☆ 高知

保育園の庭かけ回る幼子の甲高き声天からの声
三つ子乗る小柄な母の乳母車子に手を振れば母もにこにこ
寒空に向かひて鋭き葉を伸ばす水仙に白き花一つ咲く
ニシキギの夕陽に紅く染まる秋くれなゐ褪せれば冬はもうそこ
寒波にも体操指導の先生は半袖姿で手を振り跳ねる
向かうから近付く知人九十歳シャキッと背筋真似したき人

大野茜 神奈川

春嵐吹き荒れる孫の入学式四月七日赤飯にて祝う
墓参り妹家族と三年ぶり閼伽桶を手に走り行く子等
小康を得た妹は笑顔見せ孫の子守りに活き活きと動く
イベリスは木質化する花と知る真白き花の満開の後
二昔前に植えたる牡丹の木蕾を持つは何年ぶりか

加藤富子☆ 栃木





乾燥機手放す日となり惜しむ目の夫からかうわれも寂しく
クレーン車の宙に吊りあぐる乾燥機解体さるるも大きな形
籾摺り機性能良しと伝えたりトラックに乗り貰われてゆく
季節ごとの手前味噌なる保存食作らん広くなりたる納屋に
母の縫いし母の着物のリメイクの作務衣と巾着姉の手に為る
ポケットも袋も縫ってと姉に言う母の着物の端切れの模様で
零れ種芽吹く楽しみ庭を這い草取る春の巡り来たれり
千日紅ビオラひまわり百日草コスモスの芽の庭に出できぬ

藤田夏見☆ 広島

梅が枝餅

オンライン搭乗券はwalletへANAの省力吾の労力
行き先を語らぬままに乗せくるる息子夫婦のミステリー旅
山裾に雲わきおこり垂れ籠むる雲へゆらりと溶け込みてゆく
撮る間なく白き辛夷の後へ去る掴める春のこぼるるやうに
孫たちはロック、クラシックそれぞれを聞きつつ笑まふ未来がきらり
運転の嫁と息子の楽しげな会話の進みはや門司港へ
焼きたての梅が枝餅の餡うまし一会と思ひつつ参道歩む
根結ひせる老女はひとり山門にまじろぎもせず伽藍見つむる

松本英夫 東京

納骨を終えたその場で住職は塔婆立ての修繕を言う

永野雅子☆ 東京

支払いを考えながら上野まで書道展へ足早に向かう
師の作の運筆鮮やか力強い穂先の勢いに圧倒される
通信で細々続ける書の稽古辞める理由を探しておりぬ
会場の書道用品販売員は我が知らぬ師の人柄を言う
書く事の意欲が再び甦り筆持つ気力も徐々に戻りぬ

安　川　敏　子☆　埼玉

懐かしの曲名パンフに満載で思い出手繰りコンサートに行く
カルテットピアノが踊りたちまちに五感に染み入るテノールの声
見上げればむくげの新芽いっせいに朝の光を浴びて輝く
じゃがいもにあちこち芽が出ておもしろく鉢に植えたら見事な葉が出た
また雨ね洗濯止めて電話する声だけ元気で皆不調なり
目の検査三日続いてヘトヘトに眼圧高く緑内障と
手術日の決断せよとせまられて寝不足の朝両足がつる

なばなの里イルミネーション　松　居　光　子　三重

LED の色鮮やかで幻想的な光の世界に吸ひ込まれゆく
異国からの観光客と行き交ひつつ電飾のトンネルくぐりぬけたり
キラキラと光る木を背に写真撮るコロナのことも今宵忘れて
春休みに訪ひ来る女孫らに見せたしとひと月遅れにお雛さま飾る
ひな壇の前に孫らと嫁とわれ四人並びてカメラに対ひぬ
これよりは飾ることなど無いかもと言ひつつ夫とひな壇片付く





三途の川の向かうに知り人増えてゆきこの世は益益さびしくなりぬ
恵方巻きの宣伝につられ買ひて来る具の多く入る太き巻きずし
事故のためマニラに若く逝きし夫五十二年は矢の如く過ぐ
色のなき庭に飛び咲く立金花鮮やかな黄は春呼ぶ如し
枯れたかと思ひてをりし侘助の枝に小さき芽を見つけたり
飲みたしと思はぬ内に水分を取るやう言はれ飲みてゐる白湯

井　上　法　子　大阪

朝の日に煌めく川面背景に職場の庭の白梅満ちつ
江ノ島へ渡る人等に混じりつつ連れ立ちゆくは富士をみる橋
散歩する二重瞼の柴犬を褒めれば稀と聞く二重瞼は
葉桜と八重のさくらを見に行かむ散歩に誘ふ今日の掛け声
花咲けば伸びたる枝と幹の黒映える桜木ことしの思ひ
手を組みて踊りを競ふ大会に参加のわれらほぼ高齢者
高齢者に混じりて踊る小学生その滑らかさすばやき動き

齋　鹿　ミヤコ　神奈川

突き上げる辛夷大樹の枝先の数多の蒼朝日に光る
雪解けてケーンと鋭き雉のこゑわが心臓に当たる心地す
穏やかな春の日差しの中に立つ杉の大木は花粉爆弾
「あの頃はねえ」などと口ぐちに懐かしみ子育て終へたるをんな等集ふ

佐　藤　幸　子　山形

「変わりない？」と訊ねれば息子は解かりゐて「うん」と一言髪を掻き上ぐ
一泊し帰る息子を見送ればあかときの空に三日月滲む
後期高齢者医療被保険者証届くチラシと共に郵便受けに
三　好　規　子　神奈川

弓爾乎波（てにをは）の合はない台詞プーチンのウクライナ侵攻一年の演説
買ひ換ふる孫のベッドをウクライナ避難の少年に使つて貰ふ
ウクライナの親と離れてその姉と避難の少年「帰りたし」と泣くとふ
日本語の分からぬ少年は寂しからむ母はウクライナの警察署長とぞ
ウクライナのカトリーナと孫もケアプラザのチャリティバザーの売場に立ちぬ
Tシャツには水の輪ゐがかれその中をロシアのミサイル突き刺されゐる
ウクライナの避難者に子は震災を案じて配る防災用品
三月の初め見頃の鎌倉のソメイヨシノ似の玉縄桜
佐　藤　靖　子　東京

ベランダの牛蒡の広葉に蝶の来てすぐ虫の生る戸を開けられず
くれなゐに見ゆる椿が地のうへに白を混ぜつつ広がりてをり
忘れたる菩提樹のなまへ思ひだす呪文は「ブッダ」ブッダと唱ふ
読んだかな未だだつたかな図書館の本借りてくる当て事のやうに
これ以上のびないほどに伸びをしてこのままプツンと命切れさう
一日を耐へて二日目洗濯すれば即ち機械を二度回す仕儀
かの国がまたかと思ふ速報は藤井聡太六冠達成の件

（☆印は新仮名遣い希望者です）



## 交流他誌管見

中村　哲也

**■未来　三月号**

圧巻の一八八頁の誌面に、二〇二二年度未来年間賞を受賞された西藤智氏の受賞第一作『ふつうが光る』と題された二〇首の掲載に目が留まった。

仕舞わずに季節を越したマフラーが夕陽の赤を吸って毛羽立つ
空を飛ぶことをしらない手羽先の細い骨すらこんなに固い
靴が乗る土にあまたの菌がいて芝生の坂をふかふか歩く

三首引いた。日常の見慣れた風景や生活の中で自身の中に巻き起こった感動や気付きの着眼点の鋭さと、それを定型に纏め上げられる構想力の確かさを垣間見る内容歌に思われた。

氏の受賞の言葉に『歌を作り始めた頃はただ、自分のためだけに詠んでいました。作品を読んでもらうことで他者の視点が加わって、そうして短歌はコミュニケーションのツールにもなり得るのだと気付いたのは〈後略〉』と、自身の歌作に大きな影響を与えた結社の歌会やＷｅｂ上での交流に謝意を述べられている。昨今、ＮＨＫの番組「クローズアップ現代」において『空前の〝短歌ブーム〟は何映す　令和の歌に託した思い』と題された番組が放映された。

そしてそれを見たであろう知人に「今、短歌がブームなんだって」と言われても実感が今一つ湧かないのは私だけであろうか。

誌面に発表の〝場〟を持たない多くの作者を、どのように結社誌面等に糾合参画して貰えるかが、それぞれ問われているようにも感じられた。

**■歌と観照　三月号**

三月に所用にて八戸線の鮫駅で下車して道を尋ねようと、駅向かいの小さな喫茶店に立ち寄った。店内は地元の音楽愛好家の憩いの場で、四月に催される地元の祭典で披露する歌の練習中であった。同行者が大胆にも歌を所望し、親切にも居合わせたメンバーが歌ってくれた中の一曲が、一九七五年のリリース。当時は荒井由実名義の『ルージュの伝言』であった。そののち暫く個人的なユーミンブームの訪れのあと、五十嵐順子氏の時評『ユーミンの50年』を拝見した。

氏は『ラジオやテレビから流れてくる、新しい分野のサウンドにはときめくものがあった。』と当時を回想しつつ、『私たちの短歌には、曲がない。ユーミンの詩だけを見て語っているが、音楽の側から見たら、やはり50年生き延びる理由があるのだろう。その時々に新しかった言葉もメロディーも、一瞬後には古びてゆく。そんな中で歌われ続け、聞かれ続ける魅力について考えている。そして私たちの短歌の生き延び方を考えている。』と結んでいる。

狭義から言えば五十嵐氏の個人的な自問なのだが、広義には広く読み手に向けられた氏からの問いかけと感じて、あえて転載した。

一括りに「短歌」といっても言葉遣いや詠う内容もさまざまで百花繚乱である。読み手によっては共感の歌もあれば、難解な歌もあるであろう。それが一つの時代に同時に存在しているところに、多様性を尊重する現代の流れと重なるものがあるのかも知れない。

## 四月号作品三評

井上　菅子

往復の電車列車の四時間を多少は学んで成績徐々に　　新井光雄☆

電車や列車を乗り継いで、四時間という長い通学時間の大変さを、具体的に示した。前後の作品から、中学高校大学までの過程が詠まれ、優秀な作者と知る。

ほつこりと紅うすく三つ咲き居間に春呼ぶ「寒咲桜草」　　奥山清子

寒咲桜草は知らないが、紅うすくという色で、春らしい雰囲気が漂う。三つの数詞も良い。明日は四つになるだろう。

マスクせぬ春になること願いつつ冬の寒さを乗り切らんとす　　立石節子☆

マスク生活に慣れたとはいえ、顔の表情は見えず声の通りも悪い。一日も早く以前の通常な生活に戻りたい気持に共感。

根雪早く寒波の三つ過ぎたれば花屋に買ひぬ黄のチューリップ　　井上鈴子

重々しい根雪、窓も凍る寒波が三回も来た、と雪国の厳しさに籠る上の句。「黄のチューリップ」は黄色に込められた春への願望、明るさへの希求の表れ。

表紙見てオクラの花も実も好きと真夏を思う年のはじめに　　髙藤朱美☆

令和五年の冬雷の表紙絵がオクラになった。写実的で黄の色が爽やかに美しい。「花も実も好き」という率直な心情を表し、夏を待つ思いを詠む。

蝋梅の枝に来ている尉鶲人をおそれず丸くて元気　　笠岡文子☆

尉鶲は冬に見られる渡り鳥とある。蝋梅に頭が白く赤茶色の鳥が止まっているだけで絵になる。「丸くて元気」には、作者の可愛いいという気持が込もる。

雪祭り終り雪像消え去りて公園は静か春を待つのみ　　井出裕子

札幌雪祭りの様子。賑わった祭りも終わり、大掛かりな雪像も撤去された。祭りの後のさびしさをしっとりと詠む。

正月十日ピラカンサの実忽ちに「鵯」三十羽来て食べ尽くしたり　　塚本節子☆

その様子を想像した。それでも三十羽はすごい。正月から圧巻の風景。

回復しスキップしたいこの気分いつものカフェで嬉しさ味わう　　首藤文江☆

何の回復かわからないが、健康が回復したのだろう。元通りになった嬉しさが、スキップに軽やかに詠まれた。

一日雨と覚悟を決めて過ごし居り今更晴れるなんて裏切り　　金子八重子☆

楽しみにしていた外出の予定があったのに、雨の予報に諦めたと想像する。「今更晴れるなんて裏切り」、歯切れのよい結句に、つい笑ってしまった。

君の居ない梅林は砂漠もうすぐに梅は開くぞ顔をみせろよ　　越澤太朗☆

「君」が誰なのかわからないが、一連の中に親友の亡くなった歌があった。「顔をみせろよ」に悲しみがある。

久々に子の車にて巡る梅園紅白の若木清々しく見ゆ　　佐山光江

コロナ禍の自粛が緩んで外出したのだろう。梅園の若木が清々しく見えた、というところに、久々の気分が出ている。



## 四月号作品三評

鈴木　計子

老梅の根元を蔽ふ杉苔が陽ざし吸ひ込み膨らみて見ゆ　　牧　恂子

老梅の根元の杉苔に注目した作者の観察眼が光っている。花の時期なら視線は花に注がれるから、花の時期ではないのかもしれない。

ＳＬは一年間だけジーゼルへさらに電車へ戦後は加速す　　新井光雄☆

通学に乗ったＳＬに始まる鉄道の変遷と共に、戦後の日本が発展してゆく様子が感じられる。高校の三年間ＳＬで通学した体験者としては懐かしくもある。

木通の皮水煮し晒し丸三日砂糖味噌油で今日は仕上げむ　　奥山清子

地方にはその地方独自の食べ方がある。実をしゃぶる事しか知らず、肉詰めした皮を焼いて食べる調理法に驚いたものだが、この歌のような食べ方もあると知りどんな味か興味をそそられる。

裏畑の雪嵩増して穴を掘り林檎を入れる傷まぬやうに　　井上鈴子

野菜の保管方法として、雪国では雪を利用してきたが、作者は林檎を保管した。林檎の産地に住む作者ゆえの歌で、住む地の生活が感じられる。保管の林檎は糖度も増してより美味しくなっただろう。

幼な児の正装姿決まりおりネクタイすれば小さな紳士　　髙藤朱美☆

七五三の時の服装か。正装姿の具体が四五句にあり、孫と思われる幼なが何とも可愛らしい。結句の体言止がよい。

窓に見る桑の緑葉に湿る雪重き愁ひのしらじらと降る　　佐々木政子

桑の葉に降る湿気を帯びた雪を見ている作者も又、重たい雪同様の愁いがあるらしい。雪も作者も心も重いのだ。

大願寺のおみくじ引けば大吉に少し喜び深呼吸する　　笠岡文子☆

引いたおみくじが大吉だった作者はその日一日気分よく過ごせただろう。まして寺の名前が大願寺であったから……

見舞ふ叔母認知症進むと知りをれど我の名呼びて笑顔返しぬ　　井出裕子

病の進んだ叔母が作者を覚えており、名前まで呼んでくれた。見舞う前の気持がたちまち晴れたに違いない。作者と叔母との深い結びつきが窺える。

戦時中めったに作れぬのり巻の切れ端待って座りていたり　　長田久子☆

お祝事か特別な来客があったのか。めったに食べられぬのり巻の切れ端を座って待っていた作者が何ともいじらしい。

整然と連なる文字の行間に心探して賀状読みをり　　羽田孝輝

手書きではなく、文もありきたりなのだろう。何とか相手の気持を感じたくて賀状を見ている作者。受け取る側は儀礼ではなく心の伝わる賀状が欲しいのだ。

腹一杯食べて誉められるる三歳の傍でメタボは腹七分目　　金子八重子☆

食べさえすれば誉めてもらえる幼と、体の事を考え自制せねばならない作者と、その対比がおかしく、思わず頬がゆるんでくる。

**＊誤植訂正。四月号作品三評63頁下段15行目。**
**選択の予定（誤）→洗濯の予定（正）**

# 作品三

東京湾　　新井光雄☆　東京

落日の溢れる光りに身を晒し東京湾の船上にたつ
落日は自然の様よさりながら我が老いの身に昏くかさなる
落日に憂い深くもその誇り傲然としてたじろぎのなし
ビルの中に人さまざまに働かん落日知らずか影すら見えず
故里に見た落日は山の端に淡く広がる優しさのあり
落日に敢えて刃向かい身構えて負けてはならじと声張り上げる
落日に疑い持たず明日ありと望み託せし遠き遠き日
落日は我が人生のこの時ぞその佇まい見習わんかな

小田原　禮子　福岡

標本木の五輪目少し咲き遅れ励ますごとく柵に近寄る
バス停にネックウォーマーの落とし物寒の戻りの不意の夏日に
継続を励まして後「さやうなら」ラジオ講座の講師の言へり
花散らす雨のあがりて気づきたりいちやうの枝に新芽貼りつく
図書館の貸出しカードを作りたり有効期限にわれ八十歳
友と行きし万博会場の列思ふまた並びたし地に足着けて





一面の雪消え初めて黒き畔一枚づつの田圃現る
二、三箇所混み合ふほどに集まりて餌を啄む白鳥の群れ

井上　鈴子　山形

稲刈りの農機具からの穂のこぼれ啄む白鳥を業者見てをり
腹満たし長らしき白鳥高く鳴きつぎつぎ飛び立ち空のぼりゆく
春彼岸の住職を待つ仏間には暖房に揺るる供花のストック
蓬・三つ葉・犬のふぐりも出てきたり温き日を背に歩む農道
流れゆく杉の雄花の黄土色風の形を眼に追ひぬ

奥山　清子　山形

街路樹の辛夷の蕾固けれど朝日を受けて銀狐色
公募展迫れば胸の高なりて決めたる題は「山のあなた」に
文化祭に展示されたる歌三首の写真送りくる九十六歳の姉
東京の弟「あさづき」送り呉る好天続きて伸びすぎとあり
下萌えの「雪の下」のまろき葉の繊毛陽を受け白く光りぬ
「よろしく」と挨拶なさる子の同級生町議会議員の貫禄見せて

水澤　タカ子　山形

卯月のごとき温さに野を行けば雪虫の群れ輪をなしをりぬ
五十六回茂吉忌歌会はやうやくに集ひ叶ひて歌友と語らふ
歌会の帰り寄りたるカフェにて焼芋パフェめづらしみ食ぶ
新アララギの歌会ありきと師の語る歌懸稲荷をろがみ通る

車窓より高原山の松ながめ母の生家の松木々思へり
虫眼鏡のちから借りねば読めぬ文字トリセツいろいろ目をしばたたく
谷田律子☆ 栃木

遅咲きのわが庭の桜雨降りに満開めざして一気にひらく
キッチンの窓から見える大椿満開の花が地に落ちており
この時期の戦い始めの草取りは一日たりとも休むを許さず
東京女子医大の甲状腺ガン治療経過観察のみで良しとなる
初夏近し暫くぶりの友と会うあしかがフラワーパークで時を忘れて
あしかがフラワーパークの民族衣装の団体客咲きかけの藤よりも華やか
津田美知子 岩手

昭和五十四年四月二十三日生まれの吾が娘真つ青な空と満開の桜
春爛漫に生まれし娘仮死状態にて命危ふかりき
桜咲く季節になれば浮び来るあの日の母のぎこちなき仕草
娘の名吾は「さくら」と決めゐしが夫は早々に「裕美」と届けたり
松﨑みき子 岩手

大木の桜満開青空が山脈越えて近づいてくる
北風に海面荒れて船出せず網を繕ふ叔父の背まるく
三月も小屋のストーブに薪燃やす漁師の手より湯気上りゆく
夫婦船は養殖ワカメ収穫し岸壁に着けば妻より降りくる
舵をきり港へ帰る船一艘天候を読む漁師の目角





木の枝が芽吹き出したら三陸の海にサクラマス群れ来るさうな
高藤朱美☆ 茨城

はやばやとこぶし木蓮花ざかり控えいる桜の出番待つ我
陽をあびてふわりふわりと産毛舞う車検待ちつつ外見ておれば
あさイチのかてぃんさんに湧く夜に「キラキラ星」の動画は娘より（角野隼斗）
球児たちメジャーリーグ予備軍なれば次は誰かとセンバツ楽しむ
恒例の旅が戻りて栃木路へ大谷石切場に古代を偲ぶ
立石節子☆ 東京

コンサート昭和生まれの友と聴き昭和の歌を懐かしみつつ
聴き足らぬ思い残してコンサート終るとも立てずお茶の時間に
ふと意識失いしとふ友の言胸騒ぎして心痛みぬ
桜咲く森下文化センターで弟子の社中展あれば向かいぬ
コロナ禍が少し静まりパーマかけ三年ぶりに髪豊かなり
西安の更に西から吹く風に運ばれ来たる黄色の砂か
冬越して芭蕉も見たるこの黄砂ゴビ砂漠から運ばれて降る
山崎猛☆ 埼玉

白子川の青空映す川面には花筏浮き鴨らのよぎる
久々の牛久大仏雨の中緑の丘にすっくと立ちぬ
逝きしわが娘も同じ年頃に一心に本ばかり読みいき
うららかな桜咲く日に逝きし娘の制服かばん箱入りのまま

卒業の季節になりて懐かしき「仰げば尊し」「蛍の光」
原発も反対賛成言いながら都合の良いとき再稼働せり
原発で仕事をやりし我は思う戦争も原発も決めるは人間

三　村　幸　男☆　埼玉

献立は妻の要望聞き入れてオロシハンバーグ電子レンジで
リハビリで手足をほぐし仰向けに筋力低下の身体よ動け
ハナミズキの膨らむ蕾窓に見え育てたる花を見ずに逝く妻か

笠　岡　文　子☆　広島

ＷＢＣ侍ジャパン世界一栗山監督の信じる力
目の前の山に明かりがつくようにポッポッポッと桜咲き初む
満開の土手の桜を風散らし真青の空の深き寂しさ
地面から赤芽広がり芍薬の茎は伸びゆく葉のひろがりて
春くれば浮きたつ心広島カープ野球開幕にラッピングトレイン
負けてても今日の楽しみ球場に赤が波うつカープは希望
花の散る光の中の二人にてつもる話に鶯の鳴く

塚　本　節　子☆　茨城

大津波に娘をさらわれし人の言う「骨でも良いから抱きしめたい」と
咲き初めたる陽光桜の花便り遥かロンドンの息子に送る
朝からの冷たい雨を眺めつつ動画のなかの花びら偲ぶ
龍ケ崎ファーストトマト届けたし叔母の溢るる笑顔想えば





牛久大仏の横顔遥か見上げつつ先延ばしにしたる歯科医へ急ぐ
ＷＢＣの逆転劇に手を止めて訪問看護師共に泣きたり

越　澤　太　朗☆　茨城

焼芋は煙を出して石で焼く仲間ら自慢の「紅はるか芋」
焼芋機は注文仕立てのドラム缶三個に割れる我らの工夫
ドラム缶は煙を吐いて懐かしいデゴイチの如き鉄の匂いす
幟旗三本立てたる直売所朝採り野菜の看板メニュー
馴染客に菜の花注文受けて即畑へ走り蕾を渡す
大根を間引き葉付きを並べたる特売セールは売切れ御免

猿　渡　憲　子☆　長崎

日常に不都合多きコロナ禍で路線バスまで減便となる
コロナにてステイホームの暮しにも春は訪れ薄着になりぬ
ユキヤナギ椿の花を覆うごと長き枝先気ままに伸ばす
繁茂する大熊笹の間にはツワブキ伸びて大き葉広ぐ
漆黒の夜空に光る満月のスポットライトの如き眩しさ
空港のロビーにあふれる集団は大きなカバンの修学旅行生
冬雷の赤ペンの文字温かし吾のやる気を優しくいざなう

永　井　享　子☆　東京

ガマガエル土より出でてグアグアとあちらこちらで合唱す
ムクドリが落した小枝持ち帰り小びんに差して小さな花見

白鷺が大きく羽を羽ばたかせゆうゆうと行く空に見入りぬ
大鷹が大きく回り円を書く一筆書きで餌をさがすか
カラスの持つ卵を狙う鳥が二羽どうしようかと鋭く飛び交う
庭の花薄紫と白になり春まっ盛り猫も鼻寄す

後藤恭介☆　茨城

腕時計して麦の道ペンとメモ持ちつつ歩く晩学の吾
日に四度目薬さすは三種類術後の回復を薬に託す
眼の手術終えたる後の「うつぶせ寝」夜中に何度も起きて長かり
一歩ずつ回復待ちなる眼の術後今日は退院桜花咲く
眼の術後初めて畑に行くわれに妻同行すさくら満開
見知らぬ猫我が縁先にくつろぐを窓越しに見る我と妻なり
古稀越えて元気な妻の誕生日いつもの鮨屋へ宵のひととき

片桐美穂子☆　神奈川

風紋を忘れたるサハラの赤き砂小壜の中で静かに眠る
旅先で見る政治家のポスターはご当地限定アイコンのよう
職人が五秒で結わく信玄餅ゆったり広げて黒蜜たらす
中世の修道士らのいましめをゲームに冠す「メメントモリ」と
朝活はオンラインでのストレッチ身体のパーツに油さしゆく

（☆印は新仮名遣い希望者です）



## 歌集／歌書御礼

編集室・佐藤靖子

**■松木鷹志歌集『老木の酸素』**

令和四年十一月十一日発行の第五歌集で一二八首収録。四六判に近い小さな本でポケットに入るほどなので持ち歩いていつでも読める親しみのある作り方である。自作と思われる線画が達者であり、表紙裏表紙中扉みだし等を九点が飾って居り大人の詩をかもしている。この三年ほどの作品で、コロナや世の動きに関しながら、脱炭素・抗非条理の信念がよく伝わってくる。

コロナの初めの頃は、マスクの表裏付け方まで話題になっていた。

ああだ斯うだと今日のマスクを着け合へば…俺の娘の刺繍入りだぜ

〝ステルス〟の冠詞いただき猛烈の暴虐ふるふ…亜種オミクロン

紙上歌会なんぞ君等の匂ひせず…文字づらのみがコロナ禍を泣く

止めさせる手立てのないのがロシア禍である。

ロシア軍…手当たりしだい強盗し売り飛ばすといふ。何に窮して

阿賀産の結桜（ゆひさくら）みて惚けをりウクライナ危機忘るるほどに

あさぼらけ明けゆく天地　さめやらぬ老躯（おい）も注視の先づ〝ウクライナ〟

コロナ、ロシアのみではない憂えごと。

規制委の安全認定は何だつた？こたびは〝核防護不備〟最悪レベル

再稼働ゆるせぬレベルの原発に後顧の憂ひ「安全認定」

野菜作りの合間などに著者の安らぎを感じる。次の最初の歌は題名の『老木の酸素』に繋がるのだろうか。

無数なるいのち育む畑（はた）にゐて存分に吸ふ君たちの呼気

咲き按配よき順番に「賞」授け、世界最小の「菊展」の家（わが家の軒下に）

雪囲ひ材しまひたる〝骨休め〟こよひの我等は粗食で結構

（喜怒哀楽書房刊）

**■日野きく歌集『勿忘草』**

令和四年十一月三〇日発行の第九歌集で三四二首を収録している。戦争したことの無念これからの懸念、原発を含む政治のあり方を注視する社会詠が多い。

例えば小さな公園を散歩していても、満州開拓団の慰霊碑を見てしまう。

右ひだり一列ずつの隊名の碑はすき間なき一七三基

高さかたち等しく並ぶ「気をつけ」の姿勢のままのいしぶみである

つづまりはマンハッタン計画の実験場二か所の被爆者六十万人の

焼かれしあと骨は残らず灰のみの原爆死なり若き女性の

朝鮮の奥地に薬を売りし父を誇る人ありきまことは阿片

三の日の抗議集会今月も前列中央澤地久枝さん

被曝牛が被ばくの草を食みている山の牧場ただ静かなる

著者の輪郭。

中学生たりし君たち四十五年経たりまみえて花束受ける

中原中也暗誦できると女性ひとりよかった「教育勅語」ではなく

こはぜには屋号「日のや」の刻印の別珍足袋の一足残る

自然というものは対話をしてくれる。

わが前を揺れゆれている虫ながら逝きにし人を偲ばせてゆく

「しろばんば」「雪虫」「綿虫」秒のほど

会いて別れぬこの世に生きて

（短詩形文学選集53　不識書院刊）

**■石原久子歌集『雲斎』**

令和四年十一月三〇日発行、四六一首を収めている。これから夫婦二人の新生活が始まるというとき夫に先立たれた。不安と寂しさに萎えている著者を「自由を得たと思って前向きに」と励ました友の言葉、それをきっかけに始めた短歌である。『雲斎』とは農業と兼業であった足袋の底布を織る仕事の織布を人々が雲斎織とよんでいたからという。これには旅の僧が係るなにか豊かなエピソードもある。

自分にとって短歌はこころの内を素直に表現してもよいもの、そういう著者の作品から著者の周囲を見せてもらう。

百年を遥かに越えて命継ぐ大き栴檀わが畔にあり

救急車の音のやみたりひたひたと村を襲ひ来る老いの足音

大空に両手をひろげ指紋まで初秋の風を沁みとおらせて

打ち捨てられ立ち枯れてなおミニトマト土色なれど鈴なりの実が

武烈河の霧の向かふ（ママ）に吾を呼ぶは「誰ぞ」承徳大橋わたる

（故）葩島　駿

男子用トイレに「一歩前へ」なる文字あり。そうだ、「一歩前へ」だ

宮本　清

夕立ちの雨に打たれてハシャギ行く女子高生らは瀬（かわうそ）に似て

吉野　識

やや太きウラケイに囲む「コラム」とは山椒の香る囲炉裏端かな

若槻真美子

ガラガラと補助輪の音たててゆくポニーテールは王女のごとく

和田　賛三

雨雪のぴちやぴちやと降るゆふまぐれ誰（た）に告ぐべきや「とてちてけんじや」

平林　静代

これら歌作の裏にはコロナ、ウクライナ、過去の戦争、病気や死に対する思いが潜む。歌の他に随筆が添えられ、短歌に於いて気づきの喜びや日日の支えになっていることがよく伝わってきた。

（株式会社　三陽社刊）

子や孫は居てもふだんはひとり。

パソコンに向きて具合を聞く医師に一人の寂しさ話さず帰る

家に居らば今宵はイブと知らずゐんケーキ屋の前数多人立つ

近所より柚子と南瓜が届き来て肌さす寒さひととき忘る

相棒の猫と過ごす。

朝くれば黒猫抱きて畑に行く一人の生活寂しく気儘

一生つきまとう戦というもの。

澄む空にさはに実れる柿のありその空の先の空爆思ふ

（鮒叢書第一一八篇　本阿弥書店刊）

**■彩短歌会三十周年記念合同歌集『花野』**

令和四年十二月十日発行。発足三十年目の第六合同歌集となる。二十五名参加、一人三十首のうちより各一首ずつ紹介させて頂く。

初日の出射るやうに我を照らしたり百合鷗一羽天空を飛ぶ

赤嶋　浩子

独り居の友に届けんひとっ走り筍ご飯と手製マスクを

新井美智子

空を見よ大きな虹は一時の光となりて希望に満ちて

安藤ゆかり

梅の里訪ねし我に青梅は「ここよ、ここよ」と囁くごとし

池田　圭一

「傾聴のボランティアです」今朝もまた娘（こ）の声温し電話口から

石田　幸子

ハンガーに揺れてるシャツの膨らみは君の背中の形状記憶

多田　政江

真っ新の制服見せに孫来たり　白花水木蒼いっぱい

岡安きえ子

花屑を掃きて見上げる金柑の小枝に一つ空蝉かわく

加藤　春枝

本殿の裏に一筋風の道　絵馬ふれあいてカタカタと鳴る

加茂　法子

夕映の汽船行き交ふ日本海警報なき日を祈りし　五歳

小林とよみ

水加減少しひかえて新米に塩味ほんのり栗ごはん炊く

齋藤穂美子

指先の煙草の灰が落ちたのはドニエプルわたる北風の予感

坂井　実三

飼い犬のしつけみたいね「ステイホーム」自分で決める「外出しない」

櫻井芳子

あの病室で亡夫（つま）は私を待っていた　ホームから見上げる六階の窓

田代とき江

八重山の海風受けて五十年の電信屋（でんしんやー）の壁の弾痕

戸井田聖子

片陰りへ幼児入れて吾も入るしたたる汗をぬぐい佇む

富澤さき子

幕末の河井と真珠湾の五十六を生みし長岡　長岡は雨

中村　武彦

大空に両手をひろげ指紋まで初秋の風を沁みとおらせて

並木　文子

打ち捨てられ立ち枯れてなおミニトマト土色なれど鈴なりの実が

野崎　芳樹

武烈河の霧の向かふ（ママ）に吾を呼ぶは「誰ぞ」

承徳大橋わたる　（故）葩島　駿

男子用トイレに「一歩前へ」なる文字あり。そうだ、「一歩前へ」だ

宮本　清

夕立ちの雨に打たれてハシャギ行く女子高生らは瀬（かわうそ）に似て

吉野　識

やや太きウラケイに囲む「コラム」とは山椒の香る囲炉裏端かな

若槻真美子

ガラガラと補助輪の音たててゆくポニーテールは王女のごとく

和田　賛三

雨雪のぴちやぴちやと降るゆふまぐれ誰（た）に告ぐべきや「とてちてけんじや」

平林　静代

これら歌作の裏にはコロナ、ウクライナ、過去の戦争、病気や死に対する思いが潜む。歌の他に随筆が添えられ、短歌に於いて気づきの喜びや日日の支えになっていることがよく伝わってきた。

（株式会社　三陽社刊）

## 四月号　十首選

### 作品二　　鈴木やよい

メモ魔なる夫の筆跡捨て難く小さき紙片も残し取り置く

梶尾　栄子

白銀と言ひて白魔と呼ぶ雪を憎み切れずよ白は美し

小林　貞子

営業を続けることが何よりの供養と思い翌日から働く

永野　雅子☆

豆まきの声どこからも聞こえ来ず我家もそっと「鬼は外」言う

川俣美治子☆

ぼさぼさと降り積む雪もなんのその下校の子等の燥ぐ声する

川上美智子☆

壁紙に今も残れるテープあと野球少年のストライクゾーン

西村　邦子

降る雪の様子を見つつ迷ひをり受けるか止すか今日の検診

松居　光子

ささやかな楽しみとなる日曜日ことば探しのクロスワードは

小嶋　知葉☆

白髪にピンクのセーター着こなして友は待ちゐるコメダの奥に

野口　秀子

大寒の今日も始まるヨガ教室先づは「太陽礼拝」のポーズ

佐藤　幸子

### 作品三　　髙橋　説子

冬の日を浴びたるふとんの温もりに気分安らぎうたた寝やまず

牧　恂子

ほつこりと紅うすく三つ咲き居間に春呼ぶ「寒咲桜草」

奥山　清子

寒鱈の兄より届き離れ住む子を誘ひをりどんがら汁に

井上　鈴子

ひろらなる墓地見渡せば椿の赤墓石の間に際立ちて見ゆ

佐々木政子

草引けば冬には冬の草はえる冬眠の虫ころころころげる

笠岡　文子☆

戦時中めったに作れぬのり巻の切れ端待って座りていたり

長田　久子☆

除雪車の後退知らすピーピーで今朝も目覚むるまだ午前四時

羽田　孝輝

治まるを待っていられぬこのコロナ共に生きゆくすべを探して

首藤　文江☆

一日雨と覚悟を決めて過ごし居り今更晴れるなんて裏切り

金子八重子☆

君の居ない梅林は砂漠もうすぐに梅は開くぞ顔をみせろよ

越澤　太朗☆

# 山形・八戸紀行

中村　哲也

乗客をなべて座らせ土曜日の山形行きの電車は進む

堆く雪は残れり三月の奥新川の駅の周りに

窓辺には未だ雪ある県境車内の気温も下がる気のする

稜線に雪を湛へて山形を囲む峰々屏風の如く

車窓より眺むる色や仙台と盛岡までの空の青色

晴天を背(せな)に遮り空を衝く岩手富士山(やま)頂白し

青空に己が周りを朱に染めて夕陽入りゆく八戸の海

三十年近く通い続けている会社の通勤途上に、滑り台とジャングルジムが一基ずつ備えられた小さく細長い公園がある。何の変哲も無い住宅地の公園であるが、何故か子ども達が駆けるのを遮るように、園内の中央部に四本の桜の大木が植えられている。かつて公園脇の歩道を挟んで建てられていた児童館も、そこから聞こえる歓声もいつしか消え、今は集合住宅が三棟建つように、周囲の景観もだいぶ様変わりした。また、すれ違う人々の顔ぶれも同様で、高校の制服に身を包んだ少女もやがてスーツにワイシャツ姿の女性となり、何年か経つうちにすれ違う事も無くなった。今でも朝にすれ違う住所も名前も知らないごく僅かな人々のその若き頃の風貌も見知っているのが、時折不思議な縁に思う。東京に桜の開花が発表された頃ようやく仙台も梅が咲き始め、間もなくこの公園の四本の桜が咲くであろう。バブルの賑わいの中にも、その後のリーマンショックの渦中にも、そして震災直後の不安な中でも、現在のコロナ禍にあっても、必ず春になると決まって眺めるその桜の花をいつしか、ここ一年の息災に感謝と感慨をもって眺めるようになったのは歳のせいか。自宅から電車と地下鉄を乗り継いで至るこの桜を見るのも、さてあと幾年であろうか。

# 編集後記

▽「今月の30首」は岩手の岩渕綾子さん。「スマホの写真一葉・短歌二首」は高知の松中さんになりました。

▽今月から、新編集委員の中村哲也さんに「交流他誌管見」を担当して貰います。丁度「うた新聞」4月号に、氏の作品とエッセイが掲載されましたので、同号に載った井上菅子さんの「古典桜」（「私の暮らすまち」）という文章と共に転載させて頂きました。中村さんは宮城、井上さんは山形在住です。こうしてみると小誌はすっかり全国に会員の散らばる結社誌となった気がします。

▽三月より再開の本部月例歌会ですが、今月は会場が変わっています。ご注意下さい。（大山敏夫）

▽ゴールデンウイークが近くなりコロナの規制が次々と緩められて車内でもマスクを外している人を多く見かけるようになった。感染者は僅かながら増えているので今後は各自で対策をするようにという事なのだろう。連休明けに患者数が増えないことを願いながら気を付けて暮らすことを心がけてゆきたいと思っている。皆様も気を緩めずにお過ごしください。

▽「今月の30首」は岩渕綾子さん。3・11に始まり3・11に終わる一連を感慨深く読ませて戴いた。ご自宅が流された時に入院中だったことは奇跡とも思われるが千葉のご子息の所に避難されていた時大船渡の皆さんと大会に来て下さったこと、ホテルの方が「素晴しい会ですね」と言って下さったことなどを思い出して泣きそうになる。その後大船渡に戻られ、その勇気に驚いたのだったが校庭の仮設住宅暮しから現在は復興住宅に住まわれている。周囲の人との交流が温かく詠まれた一連である。

▽六月十一日（日）の本部例会会場は都営新宿線「西大島」駅直結なので便利です。くれぐれもお間違えのないようご参加下さい。

（小林芳枝）

▽寄附御礼
桜井美保子・佐々木政子・岩渕　綾子

▽新入会紹介
後藤　恭介（紹介　糸賀浩子）

**冬雷本部歌会のご案内**

**※六月十一日**（第二日曜日）
**※午後一時から四時半まで**
※都営新宿線
（西大島駅直結）
**西大島文化センター**
（第一会議室）

再開してから4回目の月例歌会です。新しい方の参加も期待します。本号掲載の作品を参加者で批評しあいます。忘れずにご持参下さい。コロナウイルスの感染予防は十分にお願いします。

〈事務局〉

編集後記

**《冬雷規定・掲載用》**

一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）

一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九　小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）

一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。

一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。

一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。

一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。

一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七大山方」とする。

一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。

一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

＊会費は原則として振替にて納入する事。

| | | |
|---|---|---|
| A | 作品三欄所属会員 | 一四〇〇〇円 |
| B | 作品二欄所属会員 | 一七〇〇〇円 |
| C | 作品一欄所属会員 | 二〇〇〇〇円 |
| D | 維持会員（二部購入） | 二六〇〇〇円 |
| E | 購読会員 | 八〇〇〇円 |

一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

**《投稿規定》**

一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。

担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
・担当　大山　敏夫
作品一欄　・担当　桜井美保子
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
・担当　小林　芳枝

一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。

一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

**《Eメールでの投稿案内》**

白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。

一、Eメールによる投稿は左記で対応する。

大山　敏夫　tourai-ooyama@nifty.com
小林　芳枝　k.yosie@nifty.com
桜井美保子　mihoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》
大山　敏夫　350-1142 川越市藤間 540-2-207　☎ 090-2565-2263
小林　芳枝　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409　☎ 03-3604-3655
桜井美保子　235-0022 横浜市磯子区汐見台 2-2-2-608　☎ 090-6029-0590


2023年6月1日発行

編集発行人　大山　敏夫
データ制作　冬雷編集室
印刷・製本　㈱ ローヤル企画
発行所　冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話　049-247-1789
事務局　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替　00140-8-92027
ホームページ　http://www.tourai.jp
頒価　700円